
真《チェンジ！！》リリカルなのは 世界最後の日

早乙女研究所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真《チエンジ！》リリカルなのは 世界最後の日

【NZコード】

N7481U

【作者名】

早乙女研究所

【あらすじ】

流竜馬の死から十年…彼の魂を受け継いだ雛鳥たちが、大空へとそれぞれ羽搏いていた頃。ミッドチルダの地下深くに、ソレは鼓動を続けていた…

真《チエンジ！》リリカルなのはシリーズ最終章、ついに始動！人類は、生き残る事が出来るのか…！

プロローグ（前書き）

のつけからクライマックス感バッグンです。

プロローグ

時は近未来。とある世界で、人類は、永遠の謎とされてきた【ゲッター線】の採取に偶然成功した。だが、これが世界最後の日の始まりになるとは、誰も知る者はなかつた。

新暦67年。突然の【ガジェット・ドローン】の襲来により、ゲッター線開発基地は瞬く間に占拠。以後3年にも及ぶ【ガジェット戦争】が勃発した。

時空管理局は、ミッドチルダ侵攻を阻止すべく、急きよ世界中のエキスパートを集めた【特殊任務班6課】を設立。その中には、かつて闇の書事件を解決に導いた英雄たちの姿もあつた。彼らの活躍もあり、時空管理局は全てのガジェットの殲滅に成功した。だが、結局ガジェットが一体、何のために、誰が建造したのかについては謎のままだつた。

そして、5年の歳月の過ぎた新暦75年の春。人類は、予想だにしていなかつた敵と遭遇することとなつた！…それは……！

「つたぐ、何だつてんだ、この騒ぎは。」

嵐の夜、一台のトラックが走つていいく。運転手の男はそう言つてハンドルを握る。

「さあ…ゲッターチームの先輩が駆りだされたんだ。ただ事でない事は確かだろ？よ。」

「やめろよ、ゲッターチームなんて…昔の話だろ。」

運転手の男は言つた。

「なあ…ヴァイス。どうも俺は、最近の局のやり口が気に入らねえ。お前の方にも、何か情報はねえのか…？」

助手席に乗っていたヴァイスは、少し黙つていった。

「そうですね…先輩。あれも確かに嵐の夜の出来事だった。」

「やめろ、忘れちまえってんだ、そんな事。」

「でも…でも、武蔵先輩…！」

「いいか、ヴァイス。俺はな…」

「あんたはそれだつていい！…でもな、俺は…」

車内で言い合つて一人。武蔵は帽子をかぶりなおしていった。

「忘れちまえよ…ゼスト隊のみんなも、もう死んじまつたんだ。」

真っ暗な部屋の中。そこには、無数のろうそくの火がともされて
いる。そこにたたずむ二人の男女。銀髪の美しい女が言った。

「かつて…」の雷だけが、愛しい死者に再び命の灯を「与える」と
のできる唯一のものと信じられていた。」

そう言って、女は煙草をくわえる。

「もちろん…物語の中だけの話と書いた方がよろしいですか？」

彼女はタバコに火を付けると、ふうっと息を吐いた。

「この場合は特に。」

すると、メガネをかけた白衣の男は言つ。

「何を言います…もはや、夢と現実を隔てていた壁は崩れ落ちたんですよ。フフフ…僕は作り上げました。物語ではなく…本物を。」

「ですが…彼女は血を流す事が出来るのでしょうか？…う、人として…」

そう言つて、女はガラスの破片を握りしめる。細い指先から血が滴り落ちる。

「ああ…それこそ、神のみぞ知る…と、言つたところでしょうか。」

「

男と女は、階段を下りていく。

「あれから…十年か。長じようで短いね。」

「何を言つ。もし…もし、彼が生きていたのなら、許してくれませんよ。絶対に。」

それを聞くと、男はメガネを直して言つ。

「そう…だね。許してくれとも言いませんし、そもそも思いません

よ。僕たちはそうされて当然の事をしてきたのですから。所詮我らは罪深き者…せめても見届けねばと思いますが…これ以上は耐えられません。」

その時だった。真横の窓ガラスに巨大な影が映る。そう、それは…

「何つ…？」

「博士つ…！」

その頃、荷物を警備していた武蔵とヴァイスも、敵に遭遇していた。

「何…ツ…？ガジェットだと…？」

「馬鹿な…」こいつらは5年前に全滅したはずじゃ……！」

その時、20mほどの大きさのガジェットから閃光が放たれる。吹き飛ばされる局員。その威力は、スターライトブレイカーに匹敵する魔導砲だった。

「畜生…！」

「困まれたか…」

その時だった。

「武蔵さん…ヴァイス…！」

二人は視線を管理局の建物に移す。そこには、白衣の男がガジェットに囲まれながらも叫んでいた。

「何をしているんです！早く荷物を守れ！！いいですか、こいつらに絶対荷物は渡すんじゃ…うわあつー？」

小型のガジェットに飲み込まれる男。

「ゴー！！」

その時だった。建物の天井が吹き飛び、その中から右腕が巨大なドリルになった、全身が真っ白のロボットが現れたのだ！！

「な…何だ、あのロボットは…？」

ロボットのドリルが、巨大なガジェットに突き刺さる。

「だが…」

「いくしかないか…！」

武蔵とヴァイスは、その隙にトラックに乗り込んで発進する…！ロボットのマニピュレーターには、さつきの白衣の男…ゴー！ノが立っていた。

「わらばだつ…後は頼んだぞ…！」

その瞬間、ロボットから閃光が走り、爆発が起こる。武蔵とヴァイスはバックミラーでそれを見た。

「み…見たか！あれは間違いねえ…リン姐さんのゲッター2だ
ぜ…！…」

そう叫びヴァイスに武藏は叫ぶ。

「あのカラーリングは…恐らくプロトタイプだ。だが、そんなこ
とはどうだつていい。問題は、誰が乗つてたかつて事だ。」

トンネルに入るトラック。そこから出ると、トラックの横をつけ
るように小型のガジェットの？型が数機追跡していた。

「チッ…来やがつたか。」

「護衛の連中は何している…！…おい…応答しろ…！…誰でもいい！
！」

本来、警備をしていた武装局員は、全員横たえていた。輸送トラ
ックは横転し、静かに燃えている。そこには、青いボディースーツ
を着た女が立つていた。

「クソッ！…」

「なあ、ヴァイス。俺たちは、ビリヤリヒンでもないものを運ん
でるらしいな…！…」

ヴァイスはストームレイダーを構える。

「チッ…つたぐ、たまんねえや…！…」

魔力弾が放たれ、一機を撃墜する。全機撃ち落とすと、突然トラックに衝撃が走る！－！ヴァイスが後ろを振り向くと、ガジェット？型が後ろのコンテナに取りついていた。

「クソッ、AMFかよ！－！」

AMFの影響で、ヴァイスはデバイスを使えない。そんなヴァイスを嘲るように、ガジェットはコンテナを壊して中の物を奪おうとする。と、その時だった。

「ヴァイス、ハンドルを代われ。バケモノに目に物見せてやる。」

「了解！－！」

武蔵の座席がトラックの後ろへと消えていき、乗り込んだヴァイスがハンドルを握る。傷害の無くなつたことを確認したガジェットが、その腕を伸ばそうとしたその時だった。

ギヤララララララ…－！

トラックのコンテナを突き破り、蛇腹状の一本の腕がガジェットに巻きつく。凄い力で締めあげられて、ガジェットの装甲はぐしやりと潰れる。トラックの荷台からゆっくりと立ち上がる影。そう、それは…

「いくぜゲッター3！－！へへ、その荷物は渡せねえなあ！－！」

ガジェットを破壊するゲッター3！－！遙か前方から跳んでくるガジェットに

「ゲッタアアアアアミサイイイイイイル！！」

直撃！！爆発！！ヴァイスは華麗なハンドルをばきで、飛んできた破片を見事避ける。

「やりましたね、先輩！！」

「へへへ、まだあみろつてんだ……何だ？」

武蔵は守ったコンテナを見た。ガジェットの攻撃で、少し壊れている。武蔵はゲッター3のカメラをズームしてその中を覗き込んだ。

「な
.....?
」

それを見た瞬間、武蔵の顔は尋常じやないほどに青ざめた。ゲッターチームの武蔵の手が、ガタガタと震えている。震えが止まらないのだ。

「せ……先ば……・・・・・！？」

運転をしていたヴァイスは、一瞬目を疑つた。暗い夜道に仁王立ちする漆黒の影。それは雷に打たれて一瞬だけその姿を現す。一瞬、そう一瞬だけで十分だつた。真紅の甲冑を身にまとい、巨大な翼を広げるその姿は、まさに物語に出てくる魔王そのものであつた。

必死にヴァイスがハンドルをきる！！火花を上げながらトラックは急停止しようとするが、間に合わない。謎の影に突っ込んでいくトラック。ゲッター3の乗ったトラックを、奴は腕一本で軽々と薙

ぎ払う。攻撃的なデザインの外殻に対し、その一対の目だけは妙に生きしく、あたかも仮面をつけた鬼の様な恐ろしい形相を醸し出している。

「なんだ……なんだあいは！？俺の……俺の知らない、ゲッターだとおおお！？」

一瞬目が合つたのち、ゲッターは崖に激突する。両目の光が消え、機能停止するゲッター。その衝撃で武蔵は血反吐を吐くと、その場にうずくまつて動かなくなつた。

「ぐ……せ、先輩！？」

横転したトラックから、辛くも脱出したヴァイスはその惨劇を目撃して嘆いた。と、巨大な正体不明のロボットがガジェットを掴むと、両腕を引きちぎつて地面にたたきつけた。爆発するガジェット。その時、ヴァイスの目の前にガジェットの奪つたコンテナが落ちてきた。

「なんだ……何が、何が一体どうなつてやがる……！？」

意識が薄れていぐのを、ヴァイスは感じた。ゆっくりと落ちていぐ瞼。と、巨人のマニピュレーターがコンテナを拾い上げる。その中身を……ヴァイスは一瞬だけ目撃したのだった。

「なつ……！」

落雷によって照らされる中身。それを見た瞬間、ヴァイスの世界は暗転した。

Change!! Lyrical NANOHA The 1a
st day of the World

燃え盛る炎。紅蓮の炎は、夜空をも赤く燃やしつくす。次々と倒されていく局員たち。そこには、無数の「デウス＝マキナ」があった。

「敵戦力【ゲッターロボG】、第三防衛ライン突破しました。地上本部まで、あと5キロです。」

「補給を怠るな！」のまま転進するんや……」

ハ神はやでは、モニターの前で焦燥に駆られていた。

「ゲッターロボ混成部隊、約6割が撃墜されました。ライトーング分隊エリオ・モンティアル三等陸士、意識不明の重症です。キャロ・ル・ルシエ三等陸士が竜を召喚しましたが、ゲッタードラゴン5機のシャインスパークによって撃破されました。一人の回収は済

んでいます。

「勝つためには手段は選らばへん。今動いているゲッターは！？」

はやてはモニターを見た。

「ゲッタアアア――ビイイイ――ム――」

ゲッターライガーにゲッタービームが命中し、爆発する。地上本部の目の前では、ティアナ・ランスターのゲッター1と、スバル・ナカジマのゲッター3が孤軍奮闘していた。

スバルのゲッター3がゲッターポセイドンを高々と空中に放り投げる。落下してくるポセイドンにゲッターパンチをたき込んで撃破する。一方ティアナはゲッタードラゴンのダブルトマホークブーメランをゲッターマホークで切り払いながら、勝機をうかがつていた。

「そこだつートマホオオーク・ブウウーメラン

一瞬のすきを突いたティアナの攻撃は、敵のゲッタードラゴンの首を刎ね飛ばした。だが

Chain attack! !

「アベーリー？」

硬直した隙をついて、一斉に放たれたゲッターライガーのチエーンアタックが、ゲッター1を串刺しにした。

「ティア！？」

ティアナをかばおうとするスバル。
だが

getter beam! !

ゲッタードラゴンのゲッタービームが、胸部装甲を焼き切る！－

—
G
e
t
t
e
n
n
o
y
o
l
o
n
!
!

同時に放たれたゲッターボセイデンのゲッターサイクロン。装甲が砕かれていくゲッター3。

「く…！く…クソッ…！」

横転するゲッター3。そこには、背中のミサイルを高々と抱ぎ上げたゲッターポセイドンが立っていた。

Strong missile! -

ストロングミサイルの直撃を受けたゲッター3は、大爆発を起こした。

「スバルウウウウウウウウ！…？く…！…！」

腕を、足を、腹を寄つてたかられてもがれていくゲッター1。ゲッタードラゴンがゲッター1の首にダブルトマホークで切りつけ、首を切断する。地面に叩きつけられるゲッター1の頭。それを容赦なくゲッタードラゴンは踏みつぶした。

断末魔と共に、ティアナとの通信は途切れた。

「く……スバル、ティア……！」

デスクに拳を叩きつけるスバル。そこに、管理局の映像をジャッカして一人の男が割り込んできた。

「ククク…ハハハハハ！君たちの持っているゲッター口ボも、あと二機だ。無駄な勝負はやめたまえ。」

「ク…スカリエッティ！！」

彼は、ジエイル・スカリエッティ。ゲッターロボ軍団を指揮し、時空管理局をたった一人で壊滅寸絶まで追いやった男だ。顔のいたるところに生々しい傷のあるこの男は、不敵な笑みを浮かべた。

「お前たちは何時もそうだ。自分たちの無力さに気付こうともせず、すぐに他の何かのせいにする。さあさあ、次の言い訳は何かな？管理局が質量兵器を持てないから？よく言つたな、ゲッターロボを持つてゐるくせして。エース・オブ・エースがいない？あんな蚊トンボと一緒にするな。ほら、言い訳を考える事は時空管理局の十八番ではないのかな？八神はやて君。だから君は……兄同然の男を死に追いやつたのさ。」

「！？」

スカリエッティは囁つて言つ。

「フン、その首に巻いてるのは彼の遺品か？馬鹿馬鹿しい、そもそも君たちが彼の真意に気づいていち早く行動していれば、彼は死なずに済んでいたのではないのか？」

指令室を突き破つて、ゲッタードラゴンの進化形のゲッタード2が侵入してくる。そこには、銃を構えたスカリエッティがいた。

「グッバイ…裸の王様！！」

はやての胸から血が噴き上がる。目を見開いたまま、あおむけに倒れるはやて。スカリエッティはゲッターを降り、はやてに近づいた。動かなくなつた彼女の顔に唾を吐きかけると、彼ははやての顔を蹴り飛ばした。

「動かない…ああ、死んだか。」

つまらなさそうに言うスカリエッティ。

「人間とはいつもこうだ。口先だけは偉そうなことを言つて、すぐ壊れてしまう。フフフ…だから私は造り上げた。壊れない人間を…戦闘機人を…！」

スカリエッティは、指令室から管理局全施設に向かつてしゃべつた。

「ハハハハハハ！！見ろ、この八神はやての無様な姿を！！これが君たち下等な遺伝子を持つ者の末路だ！！私は人類の遺伝子の選別をする。これから時代に弱い人間の生きていく資格などない！！強い部分を埋め合わせ、造り上げた、新人類こそが宇宙を制するのだ！！さあ、世界最後の夜明けに懺悔せよ、神に見放された人々よ！！フフフフフ…あきや、あひやひやはやひやはやひやはあああ！！！」

狂ったように嗤いだすスカリエッティ。彼の言う世界最後の日の意味とは！！そして、人類に明日はあるのか！！残された時間は、後少しきかない……

チエンジ
真リリカルなのは 世界最後の日

これで 最後だ

チエンジー 誕生!! 新たなる翼!

時はさかのぼる

新暦71年4月29日 ミシドナルダ北部臨海第8空港

気がついたら、あたりはまさに火の海。

炎のにおいが染みついて、むせる。

足の痛みをこらえて、あたしは一步、また一步と踏みしめる。垂れてきた血が田に入り、世界が赤く見える。それは、あたしをえもいえぬ不安につき落した。地獄。そう、ここは地獄だ。血と硝煙のにおいと赤い世界は、この世の地獄といつものを体現していた。

「…………お父さん…………お姉ちゃん…………」

開けた場所で、膝を付いてしまう。熱気が、硝煙が、体力を奪つていいく。田に血が入つて、辺りが良く見えない。涙が、ぼろぼろと零れてきた。むせかえる煙と死の恐怖によつて。

「痛いよ…………怖いよ…………こんなのがだよ…………！」

弱音が自然と口から漏れる。小さい頃から、あたしは弱かつた。痛いのとか、怖いのとか、逆に相手にそうさせるのも嫌で、泣く事しか出来なくて。そんなときこそ、いつもギン姉ばかりに助けてもらつていて。

「帰りたいよ…………！」

女神像の前に手をついて、情けなく泣く事しかできなかつた。

その時、あたしの後ろで、ミシミシと何かが圧迫される音がした。
ぱっと振り向いて顔を上げると、女神像があたしに倒れ掛かってい
た。

「やだ…やだ、やだやだやだーーー」

逃げようにも、疲れ切った体は動かなかつた。それだけでなく、死の恐怖に体がこわばつていた。優しい女神の顔が、あたしには悪魔に見えた。

『あの人』が現れたのは、その時だつた。

顔を上げると、倒れ掛かっていた女神像を、赤い閃光が消し飛ばした。その光が飛んできた穴に、落下してくる巨大な真紅のロボット。ロボットと私の目が合つ。すると、ロボットの口の部分が開いて、白いバリアジャケットの、『あの人』が私のもとに飛んできた。

「よかつた！間に合つた！！」

かなり急いでいたのか、肩で息をしていた。『あの人』は、真剣だけど安心させるような表情であたしを見つめて、言った。

「助けにきたよ……！」

その表情が、その声が、どれだけあたしに希望を与えた事か！！長い栗毛色の髪が翻つたと思うと、『あの人』はあたしの目の前に佇んでいた。その背中は、とても大きく見えた。そしてあたしの頭に手を置いて笑つてから、

「良く頑張ったね、偉いよ……もう大丈夫だからね。フロイトちゃん！ヴィータちゃん！」こは私に任せて、ゲッターを発進させて！」

ふわりと浮きあがつたかと思うと、ゲッターと呼ばれたロボットは夜空に消えていった。

「あ…………つ……！」

優しい言葉に、また涙が溢れてくる。『あの人』はもう一度笑つてから、杖を天上に向けた。

「安全な場所まで、一直線だから！」

その姿は、とても綺麗で、かつてよくて、臆病だったあたしなんかとは大違いで、

『I confirm upward security.』

相棒のデバイスが声を発すると、『あの人』は魔法陣を展開した。

『I remove a fire ring lock.』

「一撃で地上まで行くよ！」

¶ A 11 r i w g t Á r o a d c a r t r i d g e ¶

集束していく光。『あの人』は力強く……

「デイバイイイイイン」

叫んだ。

「バスタアアアー————ツ————！」

その後のことは、少し曖昧だ。ただ、あたしを抱えている『あの
人』が、優しく笑いかけてくれたのは、はつきり覚えている。

それでも… その笑顔がとてもまぶしくて。

だから、いいなって。この人みたいに、強くて優しい人になれた
らなつて。本当に単純なことだけど、心からそう思つたんだ。

新暦0075年4月、ミッドチルダ 臨海第8空港近隣、廃棄都市街

廃墟の街の一角に、二人の少女がいた。一方はボーアイッシュな青髪の少女。徒手での素振りを行っていることから、戦闘スタイルは格闘だろつ。汗が光り、キレのいい蹴りが風を斬る。

もう一方は、橙色の髪を一つに結い上げた、ツインテールの少女。自身の銃に弾を込めながら、メンテナンスをしていた。

すると、ここでその少女が、素振りを行っている少女に顔を向けて言つた。

「スバル、あんまり暴れると、試験中にそのオンボロローラー逝つちやうわよ?」

「うえー……ティア、やなこと言わないでー、ちゃんと油も差してきたーー!」

ボーアイッシュな少女 スバルは素振りを中断させると、自信満々の表情で、ツインテールの少女 ティアナに反論した。手には黒と赤に輝く、にくいアイツが握られていた。

ティアナは素つ氣無く言い返し、スバルを無視して再び作業を開する。スバルも、どこか納得いかないような表情で、ストレッチを始めた。自分で振つておいて無視はいくらなんでも酷いではないか。スバルは不本意であった。

一段落ついたのか、ティアナは時間を確認する。すると、アラームが鳴り響いて、ティアナの時計とはまた別の、大きなワインドウが開いた。

一人が反応し田をやると、10歳ほどの幼い女の子が写っている。だが、少女の纏っている服装を見て、一人は背筋を伸ばした。

「おはようござりますーわー、魔導師試験受験者さんー各、そろつてますか？」

「「はーー」「

一人が返事をすると、モニターの向こうの少女は、書類を手に取り、言づ。

「確認しますね。陸士386部隊所属の、スバル・ナカジマ二等陸士と…」

「はいー！」

「ティアナ・ランスター二等陸士ー」

「はいー！」

威勢のよい返事に、少女は笑った。

「所有している魔導師ランクは、陸戦Cランク、本日受験するのは、陸戦Bランクへの昇格試験で間違いありませんね？」

「はいー！」

「間違いありません」

すると少女は書類をしまい、背筋を伸ばし、敬礼をして言った。

「はい！本田の試験監督を務めますのは、私リインフォース？空曹長です、よろしくですよーーー！」

「…よろしくお願ひします！」

二人は、リインフォース？に敬礼を返した。

「あー…それと、今日はそのデバイスはいらないです。今日の試験は、これに乗つてもらうのですよ。」

リインフォース？が指をさす。その先には

「あれって…」

「ゲッター…ロボ…？」

と二つど二つ装甲が欠けている、使い古されたゲッター ロボ… その空戦形態のゲッターーーが立っていた。

ゲッター ロボ

新暦67年のガジェット戦争で活躍した、時空管理局の誇るスーパー ロボット。元は災害救助用として建造されたが、未知の敵の襲来に際し、急きょ戦闘用として開発された。新エネルギーのゲッターラインによって駆動し、三機のゲットマシンが合体する事によつて3

タイプのロボットに変形する。空中用のゲッター1、陸上用のゲッター2、そして海中用のゲッター3。たつた一機で、あるとあらゆる状況に対応できる、優れたロボットである。だが、問題はその操作性であり、不慣れなものが合体したりすると事故を起しあねない。実際にゲッター口ボに乗つて「戦える」魔導師は、『ぐぐく少數に過ぎない。

「本物ですか？」

「はい！武装のついていない練習機とは違う、正真正銘の本物なのですよ~」

イーグル号の部分、ゲッターの口の部分が開くと、コクピットが複座式になつていた。

「二人とも陸戦なので、オープンゲッターとゲッターチェンジは危険なので禁止なのです。この試験は、全てゲッター1でクリアしてもらうのですよ。あ、でも操縦の入れ替わりは許可されています。そのためにコクピットを改造しているのですよ。」

右にティアナ、左にスバルが搭乗する。ティアナは不満を漏らした。

「…試験官。いくら私たちがテストパイロットだとしても、いくらなんでもこのオンボロゲッターは無いんじゃないですか？…どう見てもスクラップ寸前ですよ。ちゃんと動くんでしょうね？」

「ティ、ティアーー！」

ティアナが怒るのも無理もない。ガタのきている乗機では、いつ

事故が起るか分からぬのだ。こんなつまらない事でもし死んでしまつたら悔やみきれない。ティアナの剣幕にビビッタリインフォース？は、涙目でオドオドしていた。

一方その頃 試験会場上空

「なんやなんや、あの騒ぎは。」

ヘリコプターから身を乗り出して、三人の様子を見ている女性がいた。風にボロボロの真紅のマフラーがなびいている。

「はやて、ドア全開だと危ないよ？モニターでも見られるんだかう。」

「はあ～い…」

真紅のマフラーの女性 はやは苦笑いしながら返事をして、座席についた。はやてに声をかけた女性 フェイトは、モニターを開き、続けて資料も開く。

「「」の二人が、はやてが見つけた子達だね？」

「うん、二人ともなかなか伸び代のある、ええ素体や。」

「今日の試験の様子を見て、いけそつなら正式に引き抜き？」

「うん、直接の判断は、教導官に任せてるんやけどな…」

「やつか……つか？」

ふと、フロイトは疑問を浮かべた。

「どうしたん?」

「いや、六課にくる教導面のこと、何も聞いてないなって思つて
……」

「あ…………」

はやては、ばつが悪やつに頭をかいて言つた。

「実は、うちも何も聞いてないのよ。」

「…………え、?」

ぽかんとするフロイト。はやては言つた。

「書類の手違いで、教導面が来なくなつてしまつたって事態は、
もう知つてゐやうへ」

「うう。でも、アダム提督のお陰で難を逃れたんだよね?」

「せや。けど、その教導官本人の希望で、素性は全く明かされと
りたのよ。」

「や、やうなのー?」

驚きのあまり身を乗り出すフロイト。はやくはそれを制して言った。

「今日、リインと一緒に試験官してから、多分会えると思ひそやナビ……」

ヒ、モーターに止めたその時だった。

『ま、まやでやややややん…助けてです……』

泣きそづな顔のリインのビデオが飛び込んできた。

同時刻 廃屋

『There are not a life reaction, the reaction of dangerous materials in a range. It is the course check end.』

「…………」苦笑だ。

ウイングドウを操作していた女性は、モーターを開いてコースの情景を映し出した。

「観察用のサーチャーも、攻撃対象のオートスフィアも設置完了。

では、G3もスタンバイに入つてください。」

了解だ。

モニターに映し出されるスバルとティアナ。それを見て、女性は微笑んだ。

『…………起動実験は、昨日私と後一名が行つた。動作に不備は無いはずや、外見がアレやけどな。反撃に気をつけつつ、制限時間内に、ゴールを目指してや、何か質問は?』

「えりと……あつません！」

「同じくありません！」

はやての問いかけに、一人ははつきり返事をする。

「では、スタートままであと少し、ゴール地点で会いましょうーですよー。」

メンタルの復活したリインの声とともにウインドウが消える。同時に、合図をしめす画面が現れた。

「では、いへのですよー。3・2・1…」

「「ゲッターロボ…発進…」」

「お。はじまつたみてえだな。」

廃棄都市の一 角に、一機のソレは佇んでいた。

『あー…少々手加減してな。』

「わかつてゐるが、はやくひやさんよ。でも…」

整備員の制服を着た男性は、モニターの向こうで発進したゲッターロボを見つめ、目を細めた。

「手加減は要らねえみてえだぜ？」

わうこうひと、彼は帽子をかぶりなおして顔を両手で囲いた。

「よし、ヒミツ「どうせ田に物見せてやるかあ…」

「ゲッタアア――――・トマホオオ――――ク!・」

近くの敵を切り刻みながら、ゲッターは直進していく。操縦をしているのはスバル。非破壊対象をうまく避けつつ、確実に破壊対象を攻撃していく。

「遠い…ティア！！」

「わかつたわ！ ゲッタアアアア――マシイイイ――ンガ
ンッ――！」

遠くのターゲットは、ティアナの射撃によって撃墜していく。しばらく爆発音が響いていたが、やがてそれも止み、中継ポイントでゲッターは空に飛び上がった。

「いいタイム！」

「当然！」

「ほひ… 悪くは無いな。」

タバコを吸う銀髪の女性は目を細めた。

「いや、まだまだだな。動きが雑だぜ……あつーまた食らつてんじやねえか。」

整備員の男は女性に言い返す。

「フフ……だからこそ育てがいがあるものありますへ。」

女性は笑うと、再びモニターに手をやつた。

「だが、難関はまだ続くぜ。」

「…そうだな。」

女性が手を振ると、もう一つワインディングが開いた。

「特にこれが出てくると、受験者の半分以上は脱落することになる。試験の最終関門、大型オートスフィア…といつもこの。」

「そうだ。今の一人的スキルだと、普通なら防御も回避も難しい、中距離自動攻撃型の大型スフィアの設定だけな、ライン。へへへ、知恵と勇気の見せ所だぜ。」

嬉しそうに男は空を見つめた。

廃棄都市を駆ける、スバルとティアナの駆るゲッター1。前方には、敵の大群がいる。だが

「いくわよ、スバル！！」

「もちろん！ティア！！」

怯むことなく、挑みかかる。

「――ゲッタアアア――――ビイイイ――――ム――」

チョンジ2 突撃！！ゲッター1対ゲッター3！

スフィアから浴びせられる、集中攻撃。しばらく反撃していたゲッター1だったが、一度ビルの陰に隠れた。そこからのティアナの射撃により、少しずつだが確実にターゲットを破壊していた。

「耐久度は83%…ティア、大丈夫？」

「問題ないわ。スバルこそいける？」

「当たり前！」

「の試験では、ゲッターのダメージが耐久度として検出される。100%でスタートし、被弾すると耐久度が減っていくという寸法だ。0になると、その場で試験は不合格となる。

「よし、全部クリア。」

「「」の後は？」

上を見上げると、無数のスフィアが待機している。ここからは空戦の試験だ。

「つよいよいるね。」

「チッ、田障りね。このまま上がったら、集中砲火の直撃を喰らうわ。ゲッター使って、クロスシフトで瞬殺！やるわよ？」

「りょーかい！！」

デバイスにカートリッジを込め終えたスバルは、サムズアップをした。

チエンジ2 突撃！－ゲッター1対ゲッター3！

スフィアが漂う上の階。激しい音を立てながら、ゲッターマシンガンを発射して飛び上がるゲッター1。スフィアを次々と破壊していくが、全て破壊し終わる前に弾が尽きた。弾切れの銃を捨て、ゲッターウィングを体に纏つて突撃する。それに反応したスフィア達は、狙いを定めると同時にチャージを開始する。ゲッターが接近すると同時に、大きくなる光の密度。

ズワオオオオオ

凄まじい音を立てて、ゲッターに魔力弾が容赦なく浴びせられた。
だが

「あ…………！？」

直撃を喰らつたゲッター1！－だが、攻撃を喰らつていたのは、
バージされたゲッターウィングだけだった。二人はどこに－？はや
てとフェイトが探している頃、廃屋にいた女性は、今まさに刻まれ
ている軌跡を見ていた。

空に青い螺旋の光が走り、次々と破壊されていくスフィアたち。

5

見えない敵の攻撃で、機体に大穴のあいたスフィアは、狂ったように動き回り、やがて機能を停止させ爆発する。

4

3

炎の中で揺らめく影。それが人を形どっていく。

2

炎から現れたスバルは、デバイスにカートリッジを装填し、大きく右手を引く。同時に、彼女を察知したスフィアが攻撃を開始する。スバルは回避しながら、様子を見る。

1

「でりやつ……」

跳躍。スバルは宙に舞つた。だが、空中では方向転換する事が出来ない。一斉にロツクオンするスフィア。だがそれを見た時、スバルはにいつと笑つた。

0

「ティアー！」

「分かつてゐるわ！クロスファイヤアア————」

「リボルバアア————」

地表付近の景色が揺れ、そこから大地に立つゲッターロボと、その頭の上に立つティアナの姿が現れた。

「——シユウウ————トツ————」

地上と空中から放たれた魔力弾が、スフィアを一掃した。地上のゲッターに帰還するスバル。フェイトとはやても感心していた。

「なるほど、これは確かに伸び代がありそうだね。」

「やあっ。」

くりの中、フロイトは、はやてに微笑んだ。はやても微笑み返して、モニターに手を戻す。

「へへ、やるじやねえか。」

「そうだな……さて、次は最終関門だ。武蔵、後は任せた。」

リーンフォースは、局の車で去っていく。武蔵は遙かかなたから来るであろうその影を睨みつけていた。

「よつしーさすがだよティアーー発で決まったねーー！」

「ま、あんだけ時間があればね。」

ゲッターの頭上に立つ二人。スバルは残ったターゲットを破壊し、ティアナはテバイスにカートリッジを再装填している。

「普段はマルチショットの命中率あんまり高くないのよ。やつぱティアはす”いなあ……」

「やつそこ。わざと止付けて、次に……ツー。」

突然ティアナの言葉が遮られ

「スバル、かわせ！！」

「！？」

ティアナの声で、とつさに飛んだスバル。スバルの足もとには、黒い焼き跡が刻まれていた。先ほどの攻撃で、破壊し損ねたスフィアがあつたようだ。ティアナがスフィアを目で追いながら、狙いを定めた瞬間。一瞬ティアナがよろける。直後、足元から鈍い音がした。

「がつ！？」

体制が崩れるものの、ティアナはデバイスのトリガーを引いた。

「当たれえつ！！」

「ティア！クソッ、くらえ！！」

スバルが魔力弾を撃つと、ティアナが弾丸を撃つのはほぼ同時だつた。ティアナの弾丸はゲッターの角にあたり、角度を変えてスフィアのどてつぱらに風穴を開ける。一方スバルの放つた魔力弾は

ヘリ

「ん…？なんや？」

突然、モニターの映像が砂嵐になる。あせるはやとフローイト。

「サー チャーに流れ弾が当たったみたいだけど……？」

「だ、大丈夫かな……？」

廃屋

「あつ……ダメね、完全に壊れてる。」

女性は爆発の起つる空を見上げる。

「うーん……万が一のときは、ゲッターチームが一人もいるから大丈夫だろ? けど……行つた方がよさそうね。」

そういうと、女性は空に舞い上がつた。

「ティアー! ?」

「騒がないで! 何でもないから…………! …」

「つづくまるティアナに駆け寄るスバル。彼女は何とかゲッターのコクピットに運び入れると、若干のうろたえが見えるティアナに叱責した。

「嘘つけっ! 明らかにやばい音が鳴つたよ! ? 捻挫したでしょ! ?

「だから何でもないって…………ツ！」

痛みに顔をしかめるティアナ。スバルの言つとおり、足を痛めたらしい。口クピットから立ち上がるとしたティアナは、すぐにふらつき座り込んだ。

「…………」めん、完全に油断してた。

「あたしの不注意よ。あんたに謝られると、かえつてむかつくわ。

自分の足をじっと見つめるティアナ。彼女は諦めたよつたため息をついてから言った。

「…………走るのは無理そづね。最終関門は抜けられない。

「ティア……」

最終関門の100メートルは、ゲッターから降りて走らなければならぬ。タイム的に、今のティアナには不可能であつた。スバルは暗い表情で、ティアナを見つめる。

「あたしがゲッターに残つたままサポートするわ。そしたら、あんた一人ならゴールできる……」

「そんな！？ それじゃ、ティアが…………！」

「うつせこ……」

ティアナが、声を張り上げた。その目には、うつすら涙が浮かんでいた。それは痛みによるものか、それとも…

「次の受験の時は、あたし一人で受けれるつってんのよーーー

「次つて……半年後だよーーー？」

スバルの言葉に、ティアナは鼻で笑つて言う。

「ハツー迷惑な足手まといがいなくなれば、あたしはその方が気楽なのよーーーわかつたらさつさと……ツーーー！」

また立ち上がりうとするティアナ。しかし、まだ痛むのか、座り込んでしまう。スバルは、まだ暗い表情で彼女を見つめていた。

「時間が無いわー早くーーー！」

「…ティア…」

ティアナは苛立つた声で促すが、スバルは口を開いた。

「あたし、前に言つたよね？弱くて、情けなくて、誰かに助けて貰いっぱなしな自分が嫌だつたから、管理局の陸士部隊に入つたつて。」

黙つて耳を傾けるティアナ。スバルは言つ。

「魔導師を目指して、魔法とシュー・ティング・アーツを習つて、人助けの仕事についた。」

「知ってるわよ……何百回でも聞かされたんだから、嫌でも覚えるわよ。」

ティアナは、そう言っている割にはあまり嫌な表情をしていない。むしる…

「ティアナとずっとコンビだから、ティアの夢とか、魔導師ランクアップとか昇進に、どれだけ一生懸命かも、よく知ってる！…」

「……だから、何？」

ティアナから視線を逸らすこと無く、スバルは告げた。

「あたしの目の前で、それをつまづかせるなんて、そんなの嫌。」

「じゃあどうするのよー？走れないバックスを抱えて、残りちょっとの時間で、どうやってゴールすんのよ！？」

するとスバルが、いたずらっぽく笑った。

「……裏技。反則取られるかもしれないし、下手すりゃあたしたち一人まとめてミンチだけど…うまく行けば、二人でゴールできる！…」

「……ミンチ？随分と物騒ね…でも、本当？」

問いかけるティアナ。スバルは途端に自信なさ気に明後日の方向を見ながら、

「いや、結構難しいし、ティアにもちょっと無理させるかも知れ

ないけど……よく考へると、一歩間違つたら確實に死ぬし……」

「ひじうじと考へ込むスバルに、ティアナの堪忍袋の尾が切れた。

「だああああつーーもう！鬱陶しいー何でこいつこいつ時にひじうじすんのよー？ハツキリしなさいよー！」

「ふーしゃつー？」

スバルの胸倉を掴み、顔をぐいっと近づける。

「はつきりしなさいーやるのか、やらないのか！？」

「…………」

ぽかんとするスバル。だが

「……一人でならやれる、手伝つて、ティア。」

「……残り時間、3：40」

ティアナは手を離し、スバルに時間を教えた。そして彼女を見つめた。

「フランは？」

「…………うん！」

最終ポイント

「ぐつ、馬鹿がのりのり出てきたや。」

モニターが、道路を走る人影を認識する。武蔵は操縦桿を握り、前方から飛来するゲッター1をロツクオンする。最終関門の大型スフィア。その正体は…

「いぐぞ、ゲッター3ー！」

巴武藏の駆るゲッター3だつた。

「ティア！？あれは…ゲッター！？」

スバルは前方から出てきた敵・ゲッター3に驚きを隠せなかつた。

なるほど……いかテスボスでわけねいくわよ、スバル！

「OK! ティア!!」

直進してくるゲッター1。ロックオンを完了した武藏は、レバーを前に倒す。

「食らえッ！ ゲッタアアアアアミサイイイイイイル！！」

ゲッター3の両肩に装備されているミサイルがせり上がり、水平に倒れる。発射されたゲッターミサイルは、真っ直ぐにゲッター1に向かう。しかしゲッター1の反応は遅く、直撃を喰らってしまうた。

「ああ！直撃！？」

ヘルの中、思わず身を乗り出すはやて。

「む…武藏わん…？」

武藏に何か言おうとするフロイト。だが、武藏はにいつと笑った。

「いんや…はずれだ。」

ゲッター3のモーターには、直進を続けるゲッター1の姿があつた。ゲッター3はジャガー号に搭載されている機関砲・ゲッターバルカンで応戦するが、ゲッター1はかわしていく。

「高速回避！？ゲッター2でもないのに…」

「あの子たち、スバルとティアナは…」

思考をめぐらせるはやてに、フロイトは解説をした。

「野郎！食らえってんだ…！」

ゲッター3の攻撃が、再びゲッター1に直撃する。だが次の瞬間、4・5対ほどのゲッター1が出現した！！

「な……なんだと……ええい、全部呑を落としてやる……！」

「…………フェイクシルエット。これ、滅茶苦茶魔力食うのよ？あんまり、長く持たないんだから……」

「クピシトの中のティアナが魔方陣を展開し、集中していた。

「一発で決めなさいよ？でないと、一人とも落第なんだから！」

「…………分かってる。」

スバルは、じつと前を見つめていた。

「……来る……」

「おりやあああああ……！……！……！」

蛇腹状に伸びるゲッター3の腕が、分身を薙ぎ払っていく。一瞬で分身が消えてなくなってしまった。ティアナは舌打ちをする。

「チッ、いけええええ……！」

ゲッタートマホークを構えて、投げつけるティアナ。ゲッター3の頭部に命中する。

「く……やるな、畜生め……！」

「もううたああああああッ……！」

ゲッタートマホークで斬りかかるティアナ。だが、武藏は後方に

急バツクしてかわすと

卷之三

「何！？」

高速回転しながら、空に打ち上げられるゲッター1。耐久度が見
る見るうちに削られていく。

「5…52%まで持つて行かれた！？まずい！」

「とどめだあつ！－ゲツタアアアアアミサイイイイイイイイイル

11

落下するゲッターーーに、追撃のゲッターミサイルを放つ。その時、一瞬だけゲッターーのコクピットが開いた。すぐに閉じると、ゲッターは落下しながら、ゲッタートマホークを手に持つ。

「甘いわっ！」

一発のゲッターMサイルを、当たる直前で切り払うティアナ。近くのビルにトマホークを突き刺すと、両手で持つて落下のスピードを落とす。何とか地面への激突を避けたゲッター1だつたが、着地した直後にゲッターバルカンとゲッターMサイルの直撃を喰らう。

吹き飛んでいく左の角。耐久度は30%を切っていた。

「も、もたない！？くつ…！」

モニター越しに、ゲッター3を睨みつけるティアナ。だが、隣の操縦席には誰も乗っていなかつた。

ビルの屋上

その頃スバルは、ビルの屋上からゲッターの様子を見ていた。大雪山おろしを喰らつて落下する最中に、スバルだけ飛び下りたのだ。ゲッターが無ければ試験にクリアする事が出来ないだけであつて、試験中に降りる事はルール違反ではない…と、ティアナが教えたからだ。

明らかに押されているゲッター1。角が欠け、試験官に外見からわかるように、人工的な黒煙が噴き出している。後一撃でも喰らえば、全て終わりだ。

（あたしは空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない。遠くまで届く攻撃ならあるけど、限界はある。出来るのは…全力で走ることと、クロスレンジでの一発だけ…）

ベルカ式の魔方陣を展開し、スバルは目の前を見据えていた。

「だから！」

魔方陣の光が強くなり、ナックルのリボルバーは風を纏い、火花が散る。

「決めたんだ……『の人』みたいに、強くなるって。」

閉じていた手を開けて、顔を上げる。

誰かを助けてあけられるよ」な
強い自分になるんだって!!!

拳を振り上げて地面を殴りこいた！！

卷之三

蒼い方の道が
少し
この背後は空き蔵である

卷之三

武蔵がケンタリミサイルをノハルに発射しようとすると

— セルカああああああああ！！

武蔵の注意が一瞬それた隙に、腹のビーム砲をティアナは開く。収束していくゲッターエネルギー。

ゲッターミサイルの発射を中止し、
両腕でゲッタービームを防ぐ。

「ちつ・クソツたれ！！」

ウイングロードを走るスバルに、ゲッターバルカンを撃ち込むゲッターバルカン。だが、次の瞬間

「消えた…まさか！？」

そう、ウイニングロードを走るスバルは、フェイクだったのだ！？
なら、本体は何処に？武蔵は辺りを見渡す。と、その時だった。

「うおおおおおおおおおおおおおお…！」

雄叫びを上げて、ゲッター3の右横のビルの壁が吹き飛ぶ。ゲッター3の周囲を包むウイニングロード。ゲッター3はゲッターミサイルをスバルに向かつて発射するが、スバルはありつたけのカートリッジをロードして加速する。ゲッターミサイルをかわしたスバルは、ゲッタービームを喰らつて動けないゲッター3の周囲を走る。翻弄されるゲッター3。そしてスバルは、ゲッター3の両耳の部分…つまり、コクピットに突撃した。

「な、なんだと…？」

一瞬、スバルと武蔵の目が合つ。

（あれ…？この人、どこかで…だけど…）

「…・撃・必・倒…！」

煙を噴き上げるリボルバー。その拳にリング状の魔方陣を纏い、魔力を集束していく。

「ティバイイイイイイイイ…」

それを拳に乗せて

「バスタアア――――――ツ！！！」

スバルの拳と共に放たれたディバインバスターは、ゲッター3のコクピットを突き破って、パイロットの武藏に直撃する！！

「ば……馬鹿な……俺が……！？」

光に包まれる武蔵。そこに、彼の帽子が舞い上がった。

ゴール地点前

「お！ 来たですね！」

リインが見つめるときに、ボロボロのゲッターーがあった。

「あと何秒！？」

「13秒！－くつ……間に合わない－！」

「ゲッターーのスピードで繰けるよーー！」

スバルに答えると同時に、ティアナは残りのスフィアをトマホークブームランで薙ぎ払う。

「はい！ターゲット、オールクリアです！！」

目の前で最後のターゲットが壊れたのを確認し、リインはオールクリアを宣言した。だが

「あと10秒か…かわいそうだけど……」

フロイトがうつむいた。その時だった。

10

「いくわよ、スバル！！」

急に加速するゲッター1。顔を下にして地面と平行な姿勢をとると、「クピットが開いた。

9

「いっけええええええええええええ！」

突然、急停止するゲッター1！！慣性の法則で、凄まじい速さで飛び出す何か。それは、ティアナを背負ったスバルだった！！

「う…嘘やん？」

はやは田が点になった。

凄まじい加速のついたスバルは、傾いた高層ビルの上にスライディングする。一人の通った後には、割れたガラスが水しぶきの様に噴き上がり、空を彩る。

「イヤッホーーー」の春一番のビッグウェーブね、ティアーーー

妙にテンションの高いスバル。それに比べてティアナは顔が真っ青になっていた。

「…………ちょっとスバル。当然だけど、止まる時のこと考えてる
でしょうね…………？」

それにスバルは、笑顔で

全然

爽やかな笑顔のスバルに、悲鳴を上げるティアナ。

「あ、何がちがいをばですか？」

苦笑いのリインに冷や汗が垂れる。あれ? 今の自分の位置つて進路上じゃ…

「それから。」

ベリベリグシャアアア

「...」

スバルに轢かれたリインには、モザイクがかかっていた。

「……あ……首が取れてる……」

一骨が飛び出てるね…あ、そんな事よりも！」

そういうしている間に、二人はゴールラインを通過してしまった。しかしスピードを殺しきれないらしく、凄まじい勢いで壁にぶつかつていく。

「ウフ、ウフフフ… ねえ、スバル。帰つたらどすこい喫茶ジユームでパーティーしましょ…」

「なんかティアが変なユメ見てる…………そしてさりげなく死亡フラグ立てる！しつかりしてよティアって、あ、まずい、何か死ぬ……あ、あははは……」

乾いた笑みを浮かべるスバル。

「あたしつて……ほんとバカ……」

だが、その時だつた。

「……………アクティブガードとホールディングネットね。」

女性が手を上げると、桜色の爆発が発生した。

「ちよお待ちいーあの光ー?」

一人を助ける為の魔法を発動しようとしていたはやでが、その光を目の当たりにして、驚愕した。

「こんなのは、絶対おかしいです、……」

モザイクがかかったリイン（？）が、寂しそうにつぶやいていた。

「…………?」

スバルが目を覚ますと、世界がさかさまになっていた。一瞬混乱したが、直前の記憶を思い出し、飛び起きる。周囲を探すと、サンゴのような柱に引っかかって吐いているティアナを見つけた。

「おうええええ…………」

その美麗な顔からは似合わないような声を出していたティアナは、物凄く残念な子だった。

「一人とも！危険行為で減点です！…それとリイン、リアル死ぬとこだつたのですよ！！」

ほつとするのも束の間、叱咤の声が上から飛んできたが……

「頑張るのはいいですが、怪我をしたら元も子もないですよ！…」

呆けてしまつた。あのティアナですら、ぽかんとしている。

「そんなんじゃ、魔導師としてはダメダメです！ダメダメ人間の代表です！そんな人は、額に肉と書いてやるのですよ！…！」

(に…肉ううううううう！…？つつかちつさー…?)

階級的には上とはいえ、そう思わざるを得なかつた。なんたつてフィギュアサイズの包帯グルグル巻きの何かが怒つていたのだから。

「あの…」

「何なのですか？」

復活したティアナは、恐る恐る言つた。

「それって…第一話の鉄人28号のコスプレですか？」

「うーん…いいとこ突くけど違うのですよ。ビッグオーのシュバルツバルトのつもりだったのですよ～…」

微妙に仲の良くなつた二人だが、スバルは会話に参加できなかつた。

「はいはい、その辺でおしまい。」

手を叩く音。スバルが見上げると、真っ白なバリアジャケットを纏つた女性が、空にいる。彼女はゆっくりとこちらに向かって降下し、リンの隣に降り立つた。

「最後のは確かに誉められたものではないけど、とりあえず後回し。」

ただ一人、スバルだけが女性を見つめて呆然としている。

「まずはお疲れ様。試験は終了だよ。」

スバルは女性を見つめて、口から声を絞り出すようにして言った。

「なのは…さん?」

そこに立っている女性は、高町なのはその人だった。

チーンジ3 集結！！新部隊誕生！

あたしがあこがれた『あの人』は、あの時と何一つ変わっていなかつた。ツインテールにしている髪に、真っ白なバリアジャケット。ふんわりとしたスカートに、胸についている赤いリボン。かわいい…と思つたのは内緒。

杖の形の愛機は、あの時と全く変わっていない。可変式のインテリジェント・デバイス。表情はとても優しくて、だけビビコかあとと遠くにいそうな…優しさと厳しさを併せ持つよつた、そんな雰囲気だつた。

「ランスターーー士。」

「え、あ、はい！」

「怪我してたでしょ、見せてくれない？」

「は、はい……どうも。」

怪我をしたティアを介抱するなはさん。あたしは雰囲気を出して話しかけてみた。

「あ、あの……なの…じゃなかつた、高町教導官一等空尉…！」

「ん…？どうしたの？」

近づいてくるなはさん。彼女が一歩ずつ歩きだすたびに、あたしの胸の鼓動が高まるのを感じた。思い切つて話しかけよつとすると、なのはさんが先に

「なのはさんでいいよ。四年ぶりだね…スバル。」

……覚えててくれた。そう思つと、涙が出てきて、言葉にならなくて…あたしは、なのはさんの胸の中で泣いていたんだ。

チエンジ3 集結！！新部隊誕生！

「…………あのさ。」

あれから休憩室で休んでいると、ティアが話しかけてきた。

「あたしたちが最後に戦つたゲッター3…あのパイロット…」

「やつぱり、ティアも思つた…？」

さつき戦つたゲッター3。冷静に考えると、ほとんどじまぐれの様な勝ち方だった。どうも相手が魔法を使つ事に慣れてなかつたみたいだし、何よりも…

「あの投げ技…あんなものはスペックノートに無かつたわ。ひょつとしなくても、凄いパイロットと戦えたのね、あたしたち。」

「そり…だね。ひょつとして伝説のゲッターチームとか…」

「はあ！？ そんなわけないでしょ！」

そんな雑談をしていると、ティアが時計を見て

「スバル、そろそろ……」

「ん？」

時計を見ると10分前だった。集合まだ時間はあるけど、ティアはさっきまで怪我してたんだよね… そんなこんなであたしたちは、早めにミーティングルームに行くことにした。

【バンバン撃つ! ギュンギュン飛ばしたい君! - 時空管理局に入る
うーーー】

ティアとふたりで、管理局の勧誘ポスターを見ていた。いつ見ても凄いポスター… これをデザインしたのはハ神二佐なんだって。

しばらく経つて、あたしはティアと二人で、ハ神二佐とハラオウン執務官から新部隊の誘いを受けていた。ロストロギアの探索と確保が主な任務になるっぽいけど… どうなんだろ？

「あ、待たせたね。遅れてごめんね。」

突然後ろから聞こえた、女の人の声。振り返ると、青い制服を着たなのはさんが、駆け足でやってきた。

「まずは試験の結果ね。二人とも技術は問題無し……だけど、危険行為や報告不良は、見過ごせるレベルを超えてるね。」

やつぱり…ダメだったかな。ティアもうつむいている。

「自分とパートナーの安全や、規則を護れない魔導師が、人を護ること…ができる?」

なのはさんはつづけた。

「特にスバル。あなた…救助隊志望よね? 救助隊ならまず、現場で確保すべき事は何だつて教わった?」

「は…はい! 迅速な行動と、被救助者の安全確保…」

「違うでしょ? 貴方の安全確保が先でしょ! いい、被救助者は残念ながら助からないケースだつてある。だけど、救助に向かつた貴方が倒れてしまつたら、目の前にいる人も、その奥で救助を待つている人も助からぬかもしれないのよ。」

なのはさんの言つてる事はもつともだつた。

「残念ながら、一人とも不合格ね。」

分かつていたけど、あたしとティアはうつむくことしかできなか

つた。だけど、あれをやらなければ、時間内に「ゴールはできなかつた。どつちに転んでも、いつなつてたかもしれない」と、その時だけつた。

「……一人の能力や技術的に考えると、今までの半年間のランクのままというのには「さか危險ね」というのが、わたしと試験官の共通見解。ね? そう思うよな、リイン。」

「は、はいー。そうなのですよ、なのはさんー。」

リイン曹長は緊張してゐみたい。一方のなのはさんは、あたし達に「一つの封筒と一枚の紙を渡してくれた。

「特別講習の参加申込と、推薦状。これを持つて、本局武装隊の三日間の特別講習を受ければ、四日目には再試験を受けられるようにしたよ。」

「え、えつと……」

困惑気味なあたしとティア。なのはさんは、そんなあたしたちを見て笑つて言つた。

「一度厳しい環境に揉まれて、安全を一から学んで。そうすればBランクなんて楽勝だよ!」

そう言つてガツツポーズするなのはさん。それからなのはさんは付け加えた。

「それとね……あなたたちのゲッター1とゲッター3の戦い。もうほとんど、あれで合格あげちゃいたいくらいなんだよな。」

「え…へど「う」とですか…？」

質問したティアにはさんは

「あはは、実はあなたたちの試験だけ、最終閂門を変更してたの。本来なら自動攻撃用のオートスフィアなんだけど…今回だけゲッターを使ったの。それも…ゲッターチームの乗った、ね。」

「「え…う、嘘…？」」

思わず素になつちやつたティア。だつて…ゲッターチームでしょ！？あの、ガジェット戦争を勝利に導いた…！…「クピットを攻撃した時に気付かなかつた…ん？」「クピット…！？」

「え…？ゲッターチームつて確か魔法が使えないって聞いたような…あ、あの！パイロットの方は…！…」

「あー…にやはは、入院中。でも、大した怪我じゃないよ。心配しなくて大丈夫。」

（た、大した怪我じゃないんだ…）

「それに、いいの。これは本人の希望だつたし。誰かはあなたたちに教えられないけどね。」

それからしばらく話をして、なのはさんは会議があるからと立て立ち去つた。

「「ありがとうございます！」」

ティアと一緒に、頭を下げる。すると八神一佐が、

「合格までは、試験に集中したいやろ？わたしへの返事は、試験が済んでからいつにしと」
「うか？」

す、すみません！恐れ入ります！！

思わず一人で立ち上がって、敬礼した。その様子を笑われた事が、ティアはちょっと不服そうだった。

帰り道。あたしはティアに言った。

「ねえねえ、ティア。」の封筒の中身ってどんな感じなのかな？」

「ちよつと、スバル。開けない方が良いわよ？」

でも、そう言わると開けたくなつちゃうんだよな～～～封もそれでないし、あたしは封筒の中身の紙を取り出した。

「つて、人の話を聞きなさいよ、スバル！！」

「そういうてるティアだって、興味津々そうに顔近づけてんじやん。

「ウ...ウ...ウ...」

二人で紙を見る。だけど

「え……？」

「な、何、コ、」

あたしとティアは呆然としてしまった。セヒロは、手書きの汚い字で「コマネチ」と書いてあるだけだった。

「コマネチ……暗唱が何がかな？どういう意味なんだ？」

「……ビーセ碌でもない意味でしょ？何となくそんな気がする……」

「…………でさ、新部隊の話、ティアはビーフある？」

中庭の芝生の上で横になる、あたしとティア。隣にいたティアにさつきのことを聞いてみる。

「あんたは行くんでしょ？もしかしたらなのはさんがいるかもだし、す」「コラッキーでしょ？」

「んー、まあね……」

「でも、遺失物管理部の機動課つて言つたら、普通はエキスパートとか、特殊能力もち揃いの生え抜き部隊でしょ？そんなところにいてさ、今あたしが、ちゃんと働けるかどうか……」

どうしたんだろ？いつもより弱気なティア…よし…

「何よ?」

「なーによそれ！ そんなことないわよ！ ！ バカ言つてんじやないわよ！」

思いつきりつねられた！？しかもお尻！－くつそう、いつくら帝王だつてお尻つねるなんて最低だ！かなりの馬鹿だ－－！

「くつそう…ティアのつねりを食らつて倒れなかつたのは、あたしが最初の様ね…スバルデラックスヴィクトリー、てりやーーーーー

— ! !

仮入部3日でやめた卓球と1週間と2日でやめた自転車競技部と2年ちょっと続けたババ抜き部と幽霊部員のまま3年が過ぎた物理部によつて積み重ねられたあたしの超人的身体能力によつて生み出された超必殺技！！その威力は…

「あ、足つた――――!」

「何イ！？」

空中で硬直したあたしは、そのまま地面に叩きつけられた。

「……ね、ティア。」

「うん？」

あたしは、ティアと魚肉ソーセージを食べながら話をした。ちなみにこれ、ザリガニ釣りをして余ったやつ。

「あたしは知ってるよ~ティア口では拗ねたこと言ひたけど、本音は違うってこと。」

「……そう。」

「要するにシンデレ。」

「はあー？」

あたしは続ける。

「フヨイト執務官にも、内心ライバル心メラメラでしょ~？」

「ラ、ライバル心とか、そんな大それたものはないわよ、知つて

るでしょ？あたしの夢は執務官だから、勉強できたらいいなーって
だけで……」「

「なのはさんともキャラかぶり的な意味で…」

「あんたホントに死んだ方が良いわよ！－！ただでさえ気にしてるのでに－！」

「アーニアーニーなのですかアーニー。」

「くっそー！どいつもこいつもあたしをバカにして！！」

あたしはコホンと咳して言つ。

「だったらやるつよ！あたしはとにかくいろいろなことを吸収して、もつともつと強くなりたい！ティアは新しい部隊で色々な経験つんで、自分の夢を最短距離で追いかける！」

「あ、まあやつだけど…」

あたしは付け加える。

「当面はまだまだ二人で一人前扱いなんだからさーまとめて引き取つてくれるの嬉しいじゃん！」

ん?なんかティア怒つてるような...?

「そーいうこというなつー何が悲しくて、ビリビリつてもあんたとコンビ扱いなのよー?」

「 もう 今 そろそろ お ひる だよ 」

辺りはもう、夕暮れになつていた。芝生に横になりながら、あたしはティアに誓つたんだ。

「ティア。あたし……自転車乗れるようにがんばるよ。」

「……がんばればいいんじゃない？あと、スバル。今更だけど……あんた脳みそ朦んでるわよ、このバカ！！」

「そんなア！ テイアは一日に何回バカつて言えば気が済むの！？」

「まだ一回しか言ってないでしょうが、この便所虫！」

「ガーン！あたしゴキブリよりもカマドウマの方がキモイと思つてゐるのに！－くつそう、どいつもこいつもあたしのせいにして！みんなティアが悪いんだ！－あ、こうなのつてそもそもティアが…」

あたしたちは深夜までお互いの嫌な事を相手になすりつけ合って、しまいにはお互い愚痴の言いあいになつて微妙に仲が良くなりまして、たとひ。

「武藏さん、大丈夫ですか？」

なのはとフロイトは、救護室に寝ている武藏を訪ねた。なのははケーキを、フロイトは花を持っていた。寝ていた武藏は起き上がる。

「おう、なのはちゃんにフロイトちゃんじゃねえか。あいおい、いいんだぜ、そんな…」

起き上がりざまに一瞬顔をしかめる武藏。フロイトは駆け寄つて言ひへ。

「だ、大丈夫ですか！？」

「なあに、避けられなかつた俺が未熟者なのぞ。くへ、それにしても少しは骨のある奴がいるじゃねえか…」

「うれしそうに言ひへ武藏。彼になのはは真剣な表情で言つた。

「武藏さん、例のアレですが…」

「…………俺には良く分からねえが、どうやらそうらしい。ま、今となつちやあいつが何を考えていたかは分からねえけどな…」

なのはは言ひへ。

「もつと…竜馬さんこ、ゲッターの操縦を教えてもらいたかつたです。」

「そり…だな。あいつが生きていたら…何て言つただろうな。」

『どうやら全員集まつてこられたね?』

武蔵がそう言つた時、通信が開いた。それを見るや否や、武蔵は即座に敬礼する。一瞬遅れたなのはヒュエイトも敬礼する。

『まずは、試験官お疲れ様、と言つておひつかじら? 釐我の具合はいかがでしょ?』

「恐縮です、//ヤシト提督。あと数日もすれば訓練に参加できるようになるでしょう。」

「セシトは、武藏に労いの言葉をかける。」

「それで…提督。」用件は？勞いとお見舞いだけでは流石にない
でしょう。」

ええ、もうよ。

ミゼットはほつほつほつと笑つてから言つ。

『巴武蔵陸曹長、あなたには異動してもらつわ。行先は、八神は
やて二等陸佐が指揮する、古代遺物管理部【機動六課】ですよ。そ
こにいる高町なのは一等空尉とフュイト・T・ハラオウン執務官と
同じ…ね。』

武蔵はにやりと笑つた。

「ほつ…？ヴァイスと一緒に運転係か。それにリインフォースは

シャルマルの助手だろ?「つまく舌を入れたもんだぜ、お前さんもはや
てちやんも。」

『ゼットは笑いながら言へ。』

『ほつほつほつ…階級は陸曹長なのに給料その他権限は一等陸佐
レベルまで引き上げてるんですもの…拒否権はないわよ?ハ神はや
てを押さえて筆記試験満点合格の隠れエリートさん?』

「まつたく…俺の階級は上げたくないわけだな。分かるぜ…なに
せ俺は魔力資質ゼロだからな。」

武蔵は体の包帯を触りながら言へ。

「つかしよ、まあさん。戦争でもやるつもりか?」

武蔵はやつ言つが、ゼット提督は表情一つ変えない。

『今、貴方に言つても分からないわ…いざれ話す事になるかもし
れないけれど。その日が来ない事を私は祈つてしますがね。』

「俺も『めん』むりたこゼ。」

笑いあつゼットと武蔵。

「…………おえて聞く。何故ゲッターをあんなにわるいさんですか。
5機…スクラップになつたのを呑わせれば6機ですよ。いくらなん
でも異常な戦力じゃないですか?」

『貴方達には、ゲッターロボのテストパイロットを依頼している

わ。ゲッターロボGの基本〇〇を制作するには、膨大なデータがいるのよ。』

「提督。お言葉ながら… ゲッターには深く関わらない方がいいですぜ。貴方のためにも… //シドチルダのためにも。」

しばりぐにらみ合いを続ける、武藏と//ゼット。だが、武藏はため息をついて寝転がつた。

「結論から先に言います。了解しました、//ゼット提督。あとをつきのは忘れてください。」

『それでいいのよ。』

//ゼットが笑うと通信画面が消えた。武藏はベッドの上でつぶやいた。

「ゲッターGか… おれは初代ゲッターだけで十分だと思つんだけどな。」

その夜 廃棄都市

「ゲッタアアアツビイイイイイイイムツ！…」

空から降る火の球。それは地面にぶつかると砕けて燃え広がる。一機の無傷のゲッターーが、そこに立っていた。

「出現の頻度、数、増えてきてんな？」

「うん。それに、動きも段々賢くなってるね」

「クピットが開くと、管理局の制服を纏った男女三人が出てくる。

「だが、この程度ならまだ私達でも抑えられるな。」

「ああ。」

「しょーじょ、ド新人に任せるとはめんどい相手だけどなあ……」

「しょがないだろ？。いずれ私達だけじゃ、手が足らなくなる。」

「

三人の視線の先には、静かに燃えるガジェットの残骸があつた。

チエング4 激闘！－はじめての模擬戦！

新暦0075年4月

遺失物対策本部 機動六課隊舎

「うふふー」お部屋も、やつと隊長室うしくなりましたねえ

」

部隊長室で、専用の机とイスに座つたリインが、嬉しそうに回転する。リインのサイズに合わせているため、どれもミニチュアだ。

「いやね、リインのデスクも、ちょうどいいのが見つかってよかつたなあ。」

「はいー。リインにぴったりサイズですー！」

それにはやは微笑んで返し、リインも楽しそうにはしゃいでいた。その時、来客用のインターフォンが鳴った。はやは入つてくるよう返事をすると、よくウルトラ警備隊とかの自動ドアが開く音とともに、一人の人物が入ってきた。

「おーーお着替え終了やなー！」

「お二人とも素敵ですー！」

はやは達の言葉に、二二二あるフロイトとなのは。しかしぬる瞬間、その顔が青ざめた。

「うふふー？」

口と鼻を押されたのはフロイトだった。

「うわっ、魚くわいーー何この部屋ーー」

入つて早々、部屋が臭すぎると不満を漏らす一人。だがはやてはへらへらしながら

「ほらほら、入つて入つてーーちよつと変なこおりにするけど入つて入つてーー」

「うわーーじよつとビリのじやないんだけど…はやて。鼻つまんまだままでいい?」

鼻をつまんまだま部屋に入る一人。そのまま来客用のソファーに腰掛けよひとするが

「うわーーっちょー、せやしちゃんー?なにこれーー」

肝心のソファーはボロボロで、中から綿やう黒光りする虫やうが飛び出していた。

「うん、家具買つお金無くてなーーその辺の粗大ゴリを…

「うわーーはやて、窓開けて。」

フロイトははやてに窓を開けさせると、おもむろに片腕でソファーを持ち上げると

「おいやあああああああーー!」

外にブン投げた。

真下

そこでは、エリオとキャロがアップをしていた。

「ねえ、キャロ。」

「ん？ どうしたの、エリオ君？」

エリオは真剣な表情でキャロに言った。

「この前知ったんだけども… なのはさんって僕の名前、『エリ夫』つてずっと思つてたんだって。」

はやは『エリ夫』だと思つていたらしい。シグナムに至つては『いたつけ…？ そんなの。』な扱いである。合掌。

「ええ…？ う、うそ…？」

エリオはキラキラした涙を流して言った。

「だからぞ、僕、この訓練が終わつたら

「

そう言いきる前に、エリオの体にはボロボロのソファードが突き刺さつていた。

「エリオく――――――ん？！」

下の事など、これっぽちも気にかけていない一人は、涼しい顔で敬礼した。

「本日ただいまより、高町なのは一等空尉、」

「フェイント・T・ハラオウン執務官、」

「「両名とも、機動六課へ出向となつますーどうぞ、よろしくお願いしますー！」」

背筋を伸ばし、敬礼をした後、三人は笑いあつた。どうやら臭いの元はソファーだったようだ。部屋が臭くなくなつただけで、フェイトの機嫌はうなぎのぼりだつた。と、その時、部屋に青年が入つてきた。

「あれ…臭くない…あ、申し遅れました。グリフィス・ロウラン准陸尉であります！」

「グリフィス、すごい成長したね。前はこんなに小さかったのに…」

「その節はどうも…」

グリフィスは一礼し、はやて達と話し始めた。

「テスタロッサ。」

はやての挨拶の後、フェイントと廊下を歩いていたシグナムが立ち

止まって言った。

「何ですか？シグナム？」

「…………地下から、アレーリしきものが見つかつたらしい。」

それを聞いた時、フェイトは思わず身構えた。

「……本当なのですか。」

「間違いない。」この近辺のゲッター指数が若干上昇したのも頷ける。

フェイトの額に脂汗が浮かぶ。信じられない事だった。そう、それは物語の中だけの話であると、誰でも思っている事だった。

シグナムは、あたりに人がいないことを確認して、小さな声で話す。

「これを知っているのは、私とクロノ、そしてスクライアだけだ。たまたまその場に居合わせたのだがな……」

「じゃあ、ゲッターGの起動実験の失敗も……」

シグナムは無言で頷く。彼女も、何かの間違いであつてほしいとフェイトに告げた。こればかりは、自分たちで何とかできる問題ではなかった。伝承の通りであれば……

「まさに……神のみぞ知る、と言つたところですね。シグナム。」

「神など一度も挙んだ事の無い私だが……この状況を打破してくれ

るのであれば、いぐりでも拝み倒してやれ!」

早速訓練を始めるために、フォアード四人はなのはについていつていてる。四人ともなのはを前にして緊張しているようだ。すると、そのなのは突然こちらを振り向いた。

「確認していなかつたけど、四人とも自己紹介は?」

「名前と、経験やスキルの確認はしました。」

ティアナがそう答える。すると

「あと、部隊分けと、コールサインもですー!」

ティアナに続けるように、エリオ・モンティアルが返事をし、隣にいたキャロ・ル・ルシエも頷く。

「そう、分かつたわ。」

なのはは答えると、再び移動を開始した。

訓練施設前

白と青を基調にした、涼しげな印象の制服を着て、なのはは海を見つめていた。

「海……か……」

十年前のホワイト・クリスマス。仲間を守るために、自らの命を犠牲にして海に散つていった男。

「竜馬さん……私ね、戦技教導官……教官をやっているんだ。」

きつとあの人なら、鬼教官だなんだ言つてきたに違いない。そう思つと目頭が少し熱くなつた。

「なのはさーん！」

そこへ後ろから声がかかつた。なのはは目を軽くぬぐつて振り向くと、スーツケースを持つたメガネの女性が、こちらに駆け寄つてきていた。

「シャーリー！久しぶりだね。」

「はい！お久しぶりです！」

シャーリーと呼ばれた女性は、二二二二しながら一礼した。ふと、なのはが視線を横にずらすと、こちらに向かつて走つてくるフォアードが見えた。なのはは小さく頷いてから、四人を訓練スペースへ案内する。それから、四人にデバイスを手渡してから言う。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入っているの。丁重に扱ってね。それと…」

なのははシャーリーに視線を向けて、彼女を紹介した。

「メカニックのシャーリーから、一言」「

「えー、メカニックデザイナー兼、機動六課通信主任の、シャリオ・フィーノー等陸士です。みんなはシャーリーって呼ぶので、そう呼んでね！」

シャーリーは微笑んでから、説明を始めた。

「みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので、時々、訓練を見せてもらったりします。デバイスについての相談とかあつたら、遠慮なく言ってね！」

「それでは、早速訓練に入るよ。」

説明が終わり、なのはは彼女にシステムを動かすよう指示する。シャーリーは元気良く返事をすると、ウィンドウを開いてパネルを操作した。

「機動六課自慢の訓練スペース！教導隊完全慣習の、陸戦用空間シミュレーター…コードAwakihisineKでログイン…！」

嬉しそうに、ウィンドウのコードを入力すると、海上に浮かぶ何もない防波堤から、ビルが出現した。

「わあー！」

「すゞ……」

何もない海上に突然都市が現れたのを見て、フォアード達は感嘆の声を漏らす。

「はいはーい、みんな来て！」

そんなフォアード達にはが声を掛け、先行してスペースに入つていく。それを見て、彼らも慌てついていった。

同時刻

八神はやては、真剣な表情で廊下を歩いていた。するとそこへ、金髪の白衣の男が現れた。彼ははやてのよく知る人物だった。

「ユーノ君、ひさしひりや。」

「やあ、はやて。直接会うのは…一年ぶりくらいだったかな？」

彼こそが、成長したユーノスクライアだった。義手は外しており、片方の袖がだらりと下に下がっている。義足も戦う事は無いので、出来るかぎり体の負担をかけないものに変更されていた。ズボンの裾から、金属のスプリングがのぞく。ユーノは杖をつきながら、はやてと並んで歩いていった。

「せやな。けど…こんな形では会いとつかつたな。」

関係者以外立ち入り禁止の入り口をくぐり、警備員に敬礼する。ほとんど顔パスでエレベーターに乗ると、地下のフロアまで降りていった。

「まさか…これが【オリジナル】の…？」

はやての問いに、ユーノは首を横に振った。

「いや、違う。これは完全に機能を停止している…あ、着いたよ。

」

扉が開き、二人はソレの前に立つた。地下の岩盤から発掘されているソレは、時空管理局のゲッターロボよりも、一回りほど大きい巨人だつた。装甲は劣化し、もはや岩と外見の区別がつかない。しかし、そのシルエットは、はやてにとつて見覚えがあった。それは

「どう見ても…ゲッタードラゴンやな……」

時空管理局が、ゲッターロボの跡継ぎ機として開発を開始したゲッターロボG…その空戦形態でゲッターーに相当する機体、ゲッタードラゴン。それと巨人は酷似していたのだ。

「そう、これはゲッタードラゴン。金属反応は検出されだし、微量ながらゲッター線反応もあつた。」

ユーノの言葉に、はやては耳を疑つた。

「え…！？だ、だつてゲッターGは、まだ起動実験までこぎつけてあらへんよ。せやけど、こいつは聖王オリヴィエの時代の地層やないか。その時代に動くゲッターがあつたとでも言つんかいな。」

はやての問いに、ユーノは眼鏡を直して言った。

「僕だって信じられないよ。でも……これは事実なんだ。現にこいつが発掘されたのは、岩盤の中で突然再起動して動き始めたからだつたんだ。それに……」

今度は、二つの物体をユーノははやてに見せた。

「嘘……やうう？」

今度ばかりは、はやてすらも空いた口が塞がらなかつた。ユーノは言つた。

「そう、ゲッターライガーと、ゲッター・ポセイドンだ。この二体が急に暴れ出し、リインフォースのゲッター2で撃破してもらつたが……信じられないだらうけど、生きてるよ。こいつは。」

ゲッター炉心にエネルギーを入れれば、動くかもしれないところは言つ。はやては、ぼそつと呟いた。

「ゲッターとは……ゲッターとは何や……？」

その問いに、ユーノは微笑んで言つた。

「ゲッター……それは、命と死。対局する宇宙のそのものだよ。」

Side スバル

『……よし、みんな聞こえる?』

「はーーー!」

なのはさんの念話が聞こえる。いよいよ訓練本番。私は頬を叩いて気合を入れた。

『じゃあ、早速ターゲットを出していくれ。まずは八体かい。』

通信の向こうで、なのはさんとシャーリーさんの会話が聞こえた後、金属の装甲に覆われた、橢円形のロボットの様なものが現れた。『私達の仕事は、搜索指定ロストロギアの保守・管理。そして、特殊な事態が発生した時の戦闘。』

見たところ武器は無く、胴体部分の中央にはレンズが付いている。パツと見、父さんが見せてくれた地球のアニメのガンダムに出てきたボールみたい。攻撃方法は、体当たりか…レーザー…ミサイルが収納できそうなスペースは無いし…

『自立行動型の魔導機械、これは近づくと攻撃してくるタイプだよ。』

ホログラムだと分かっているけど、見た感じも質感も、資料映像で見た本物と全く同じ。ティアを見ると、自然とデバイスを握る手に力が入っていた。私もリボルバー・ナックルを握りしめる。

『攻撃は結構鋭いよ。それでは、第一回模擬戦訓練の説明をするね。勝利条件は、逃走する目標を全て破壊、あるいは捕獲。失敗条件は誰かが撃墜されるかタイムアップ。一機でも残っていたら失敗だから気を付けて。制限時間は、合図があつてからの15分。いい?』

「――「はい!」」

『それでは……』

と、なのはさんが一旦区切つて、号令をかけた。

『リリッシュ・ショーン・スタート!』

時空管理局本局

「レリック?」

クロノ・ハラオウンは、盟友のユーノと話をしていた。完全に遮

「古代文明の時代、何らかの目的で作られた超高エネルギー結晶断された防音室での会話。これは機密レベルの事だった。

「古代文明の時代、何らかの目的で作られた超高エネルギー結晶断された防音室での会話。これは機密レベルの事だった。
体…か。」

「見た田こそただの宝石だけど、暴走したときの最大エネルギー量は、ウランの38倍。この建物だって、地面」と跡形も無く蒸発するだろうね。」

「…か面白そうに、ユーノはペン回しをしながら言つ。

「過去に四度発見されて、その内三度は周辺を巻き込む大災害を起こしてゐ……まあ、死傷者が今まで400人以下だから、奇跡と言えば奇跡だよね。」

クロノは悩みながら言つ。

「なるほど… 本来武器として使用する事を目的として造られたのではない…となると…」

「これほどまでの動力を複数必要とする【巨大な何か】を動かすためだとしたら…？」

ユーノは頭をぽりぽり搔きながら言つた。

「んで、その内二件では、製造プラントらしき施設が発見されると…この二件は甚大な被害が出たものの、死傷者はゼロ…と。」

「そう考えると、主犯は技術者か、それに明るい人間…あ、お前とか？」

一升瓶の日本酒を飲んでいたユーノは苦笑した。

「おいおい、確かに爆発は芸術だと思つけど……僕が人に迷惑をかける事なんてするかい？」

「年中してんだらうが。宿舎一つ吹っ飛ばした事もあつたよな……」

「あはは、あれは新型爆薬の実験で……」

ユーノは、日本酒を飲んで言った。

「それにしても……災害が起きた後、まるで痕跡を消すようにして施設が破壊されている。」こちらは全く証拠がつかめず、なおかつ目撃者がいない……となると……」

「広域次元犯罪の可能性が高いな。それと、局の内部や情報伝達システムにかなり明るいと見た。」

「おうおう、やつぱりクロノは賢いな。それに、そのレコックを収集しようと動き回つてるのが……」

ユーノが、新しいワインデウを開く。

「ガジェット・ドローン……か。」

「特定のロストロギアの反応を検索し、それを回収しようとする、自立行動型の自動機械。まあ、ゲッターの敵じゃないけどね。」

「だが、こいつはゲッターと違つて小回りが利く。下水道などに

逃げ込まれた時は厄介だな。白兵戦で落とさなければならなくなる。そこに来てAMF…ヒヨウ「どもには、少々荷が重い気がするが?」

「コーヒーの飲みながら言つクロノに、ユーノは酒瓶を振り回して言つた。

「はは、だからさ。よく考えたよ、はやての奴も。」

「ああ…だが、我々には時間が無い。そ…勝利するためならば、俺は手段を選ばん。」

部屋に照明が灯る。ガラス張りのクロノのバックには、巨大なゲッターの顔が映つっていた。

Side スバル

「うおおおおおおおおお…！」

手始めに、ターゲットのガジェットに向けて、ナックルから速射砲を放つて様子を見る。でも、AIのくせに軽々かわすと、一気に加速して逃走を続ける。

「何これ、速つ！？」

「このスピードだと、今のあたしじゃ追いつけない。と、ガジェットの進行方向に、エリオがいた。

「でりやああああっ！－！」

エリオはレーザーを避けてから飛び上ると、ストラーダを振つて斬撃を飛ばす。決ました！と思つたけど…ガジェットはそれすら避けて、逃げていつた。空中を浮遊しているから、どの方向に逃げるか分からぬし…

『前衛一人、分散しすぎ！－ちょっとは後ろのこと考えて…－』

『あ、はい…』

『「めん！－ティア！－」』

しまつた！攻撃に集中しすぎて、ティア達のことが頭になかつた…前衛は攻撃するだけでなく、後衛を守る仕事もあるのに、忘れてたな…

エリオと一緒に追跡してると、ティアの魔力弾がガジェットに放たれた。私の顔の横をすり抜け、強化された弾丸は、吸い込まれるようにガジェットに飛んでいく。あれ…？何で避けないんだろ？そう思つてたら、ティアの弾丸が着弾する直前に消えちゃつた？！

「ツ！－バリア！－？」

「違う、フィールド系！－」

キヤロが言つ。この手のエキスパートが言つんだから、多分あつ

てるんだと思う。でも…何で…?

『そう、ガジェット・ドローンには少し厄介な性質があつてね。攻撃魔力をかき消す【アンチマギリンクフィールド】、AMF…このフィールドに入った、魔力で生成されたエネルギー体は消滅するの。』

なのはさんが説明を入れてくれるけど、聞いてられる状況じゃない！そうしているうちにガジェットは逃げていき、タイムリミットは刻一刻と迫っている。時計を見たら、あと8分しかなかった。ウイングロードを展開して、全速で追いかける！

『バカ！危ない！…』

『それに、AMFを全開にされると……』

ガジェットとの距離が5メートルほどに差し掛かった時、急にウイングロードが消え始めた。

「や、やばっ！…？」

宙に投げ出されビルに叩きつけられたけど、何とか着地する。

『飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる。』

痛たた…説明最後まで聞けばよかつた。するとなのはさんからオローが入る。

『スバル、大丈夫？』

「は、はい！なんとか…」

『まあ、訓練中では、みんなのデバイスにちょっと工夫をして、擬似的に再現してるだけなんだけどね。でも、現物からデータを取つてるし、かなり本物に近いよ。油断しないで。』

周りの事を考えずに、自分だけ焦つて…気合入れなきゃ！

『対抗する方法はいくつかあるよ。自分で考えて、実践してみて。』

対抗する方法… そういえば、天候操作魔法で作り上げた雷とか、魔力で撃ち出した小石とか、魔力で発生した効果までは消せないはず。だつたら……

『スバル！いくつか試したい方法があるの。』

ティアからの念話に答える。

『あたしもある。エリオ！あいつら逃がさないように先行して、足止めできる？』

『は、はい…やつてみます…！』

エリオは頷くと、ストラーダで加速して飛んでいった。

「みんな、よく走りますね。」

「そうだよ。【夕陽にほえろ！】だって、新人局員は…」

モニターの前で、シャーリーとのはは談笑していた。

「ふ、古いの知つてますね…なのはさん。あれつて確か、イシハラさんやマツダさんが生きてた頃だから…えつと、三十年くらい前…でしたっけ?」

「うんうん、地球にも似たタイトルのドラマがあつてね…出演者の名前や顔までそつくりなの!でも、ジーパンの最期は地球の方が良いよ。今度貸してあげよつか?」

傍観者とは、大体こんな感じである。

前衛のあたりは、エリオと一緒にガジェットを追い詰める。エリオはストラーダのカートリッジをロード。頭上で回転させて、その勢いで足場を斬りつける。全体重を乗せた斬撃は、真下のコンクリートを破壊する。土煙と衝撃波に乗つて、その破片がガジェット一機を貫いた。もう一機は攻撃を躊躇し、逃げていく。でも

「逃がさないよーー！」

まずはカートリッジを消費して、いつも通りガジェットに殴りかかる。案の定、AMFが発動して威力が出ない。だけど！

「ふつー」

後ろにいたガジェットを足で挟み込んで、地面に叩きつける。そしてナックルを打ち付けて、ギアを回転させるーー！

「うりやああああああーー！」

狙うのは、一番装甲の薄いレンズ部分！AMFを発動したつてもう遅い。ビームが収束していくけど、それより早くあたしの拳がガジェットをぶち抜いた。

すると、目の前を飛んでいたガジェットが、炎に包まれて爆発した。多分キヤロがつれてたフリード…？だと思つ。すると、隣を飛んでいたもう一機の動きが鈍くなつた。

「我が求めるは、戒めるもの、捕らえるもの。言の葉に答へよ、
鋼鉄の縛鎖…！…！」

キヤロの詠唱が聞こえてくる。これは…召喚魔法？

「鍊鉄召喚！アルケミックチェーンーー！」

魔方陣が展開されて、光の鎖がガジェットに絡みつく。破壊よりも難しい捕獲をするなんて…ティアと同じく、器用な子だなあ。

『スバル！上から落とすから、そのまま追つて！』

「りょーかい！！」

ティアからの指示だ！目標は、生き残っている3機。時間はあと2分しかない…弾を精製するティアを通り過ぎる時、一瞬魔力を薄い膜でコーティングしているところが見えた。フィールド防御を突き抜ける、多重弾核射撃の遠距離系。AAのスキルを使うなんて…ただ殴つてるだけのあたしとは違うね。

「ヴァリアブルッシュьюート…！」

三発のオレンジの弾丸が、あたしを追い越していく。三角形の陣形をとつて進むガジェットは、お互い離れて回避しようとする。でも、ティアは敵が避けることを見越して、先に三角形の頂点を狙つて弾丸を放つた！避けようとすれば他のガジェットと激突するしかといって離れれば、ティアの弾丸に貫かれる…！自動で攻撃を避けるようインプットされたガジェットは、空中で衝突して爆発した！

「ティア！ナイス…！あの攻撃をおとりに使うなんて…」

『フン…うるさいわね…このへりい、とーゼンよー…』

相変わらず檄を飛ばすティア。でも、なんで訓練が終わらないんだろう？あたしが黒煙を凝視していると

「し、しまつた…？まだ一機いる…！」

嘘…？全部自滅したと思ったのに、大破したガジェットがよろよ

ろと黒煙から現れた。時間は…あと十秒！？ティアはいまさら撃てないし、キャロは罪系だから無理。エリオやあたしのスピードでは、もう追いつけない。

（考えるんだ…考えるんだ、あたし…）

考える前に、全速でガジェットに向かって突っ走る。ほとんどは言つてない脳みそをフル回転させ、あたしは攻略法を探す。あたしの魔力砲は威力が無くて…ん？魔力砲…飛ばす？

その時、あたしは閃いた。

「そうだ！これなら…！」

9

カートリッジをありつたけロードする。

8

右手のリボルバー・ナックルのタービンを、最大速度で回す。

7

それを確認すると、あたしはナックルを腕から引き抜いた！

6

ナックルを右手で持ち、大きく振りかぶる。

5

バチバチと火花を上げ、徐々に減速していくガジェット。いける
!!

4

全ての魔力エネルギーを解放して、ナックルの後ろからジェット
噴射を作りだす!!

3

慣性の法則を利用するため、急ブレーキをかけながら投でき姿
勢に入る。そして

2

「いっけええええええええ!!」

あたしは全力でリボルバー・ナックルを投げつけた!!

1

そして

その先の記憶は、あたしにはなかつた。

チーンジ5 出動!! ファーストアラート！ 前編

格納庫でゲットマシンの点検をしていた武藏は、偶然にもシグナムと出会つた。彼女も彼女で整備から何か聞いているようだつたが、話が終わつて武藏に気づくと、こちらに手を振つた。

「武藏、久しぶりだな。」

「そつちこも、シグナム姐さん。ゲットマシンを見に来たのか？」

武藏の問いかけに、シグナムは「ああ」と受け答えをする。見上げる先には、真紅のマシン… イーグル号の姿があつた。

「マイナーチーンジを繰り返しているからな、ゲッターは。マシンの確認は必要不可欠だ。」

シグナムの言葉の訳は、ゲッターロボの開発体制にあつた。今、ここにある「ゲッターロボ」は開発途上のものであり、完成品ではない。建造された年月日が大きく異なるものは、ゲッターの外見そのものすら若干異なつていてもものも多いのだ。極端な例ではゲッターロボ、時期によればドリルの位置が逆だつたりと、理解しがたいマイナーチーンジを遂げているものも多々ある。

しかしながら、ベース自体はそれほど変化していないので、合体のモーションといった最も重要な動作は共通する様に造られている。不慮の事故を減らすためだ。しかしながら、細部のパーツを変えつつ、改良を加えていくコンセプトはそのまま開発当初から受け継がれているのだ。

「俺は第一世代型が肌に合つた。第一世代は、そもそもゲッター

アームがほんと伸びなかつたしな。」

「第二世代…ナカジマ達の壊した練習機の型か。」

武藏は頷く。生前に乗っていたゲッターに、最も近いというのが理由だつた。ゲッター3はクセのある機体のため、それは如実であった。

「そういうえば、おとといにも、もう一機完成したらしいな。もうそろそろで搬入されると思うんだが…」

武藏がそう呟くと同時に、格納庫がライトで照らされる。

「お、来たか。」

格納庫に入つてくる、二台のトレーラー。その先頭には、手を振るヴァイスの姿があつた。

チエンジ5 出動…ファーストアラート！ 前編

「…それじゃあ、今日の早朝訓練はこれでおしまい。みんな、頑張つたね！」

バリアジャケットに身を包んだなのはが、笑顔で訓練の終了を告げながら着陸する。それと同時に、まるで糸の切れた操り人形のようになどれ込む、新人四人たち。その顔は安堵の表情を見せながらも、死にかけていた。

あれから一週間が過ぎた。はじめての模擬戦は合格の形で幕を下

ろしたが、リボルバーナックルを投げつけるという荒技をやり、あまつさえ転んで頭を打つたスバルは、後できつちりとなのはからお仕置きを食らつた。気を失つたのも数分で、幸いにもそこまで大怪我にならなかつたからいいが…とはなのは談。皆に心配をかけてしまつた事を謝罪しつつ、翌日からすぐに訓練に参加したスバルに、なのはは目を細めた。

あれ以降、なのは達は早朝にトレーニング中心の訓練を行つており、最後になのはと新人で模擬戦も行つていた。模擬戦といつても、新人側の勝利条件は一撃を入れさえすれば良いもので、圧倒的なハンディキャップが付けられていた。結果だけなら新人側の勝利で終わつたが、四人全員でかかつて、このハンデでギリギリ互角というものが。結果的に毎回血を見るのは新人側である。「血祭りにあげてやるなの」と笑顔で言つなのはさん。最近その笑顔にドキッとしてしまつたティアナは、もうそこまで精神が汚染されているのかと、たまらなく悔しくなつた。後で聞いたら、新人全員が同じ感想を持っていた事を知り、人知れず悲しくなつたティアナであつた。

「キュク～？」

「どうしたの？フリード……あれ？なんか焦げ臭くありませんか？」

ひっくり返つてるメンバーの中、キャロが鼻をひくつかせながら言つた。

「そういえば確かに……」

「ス、スバル！あなたのローラー！…」

「ええつ！？」

ティアナに指摘され、足元を見るなり飛び上がるスバル。お手製のローラーシューズが火花を散らし、煙を噴き上げていたのだ。スバルは急いでデバイスを取り外すと、けんけんしながらティアナに倒れ込んだ。ここ最近の訓練で、ついに限界を迎えたようだ。

「あちゃー……こりゃマズイね……今日一日じゃ直らないかも……」

頭をかくスバル。すると、のしかかられていたティアナが不満を漏らした。

「ちょっと、スバル! どきなさいよーー!」

「えー? いいじゃん、ティア。」

そう言つて、犬みたに頬ずりしてくるスバル。きつと見えない耳としつぽがあるんだろうと、キヤロは思つた。と、スバルは思い出したように

「あー…そついえば、ティアの銃も弾を詰まらせていたよね。大丈夫?」

「大丈夫……って言いたいけど、正直辛いわね。毎日調整して、騙し騙しつて感じね」

スバルを引っペがしながら、ティアナも自分のデバイスを見る。ティアナのアンカーガンは、今回の戦闘中に一度、弾詰まりを起こしていた。模擬戦、それもあの場面だったから良かつたものの、これが命の駆け引きのある現場だったら…笑い事では済まなかつた。完成品のデバイスを持っているエリオとキヤロは機能不全云々は無

かつたが、将来的には…と不安になっていたその時だった。

「うーん……みんな実力もついてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな?」

「「「「新デバイス…！」」」

なのはの言葉に、新人四人は驚きの声を上げる。それを見て微笑むのは。以前から話だけは聞いていたが、もう完成しているなんて、誰も思つていなかつたのだ。

「そうだよ。正確にはデバイスを交換するのはスバル、ティアナの一人で、エリオやキャロの二人は、それぞれ手を加えるだけなんだけどね。」

「つまり自作組は全交換、って訳か…」

「確かに限界は感じてきたし、いい機会なのかもね。」

少し名残惜しそうに、自分の自作デバイスを見るスバルとティア。お疲れさんと小さく呟く一人。と、なのはは言った。

「それじゃあ私が連絡しておくから、後でシャーリーのところにみんなで行こうか。とりあえずシャワーを浴びて、それからね。」

「「「「はい…！」」」

四人は、元気よく答えた。

シャワーを終えて集合すると、新人四人はメンテナンスルームに来ていた。

「うわあ……これが……」

「私達の新デバイス……ですか？」

少し遅れるとなのはから聞いた四人は、一足先にシャーリーの元へ訪れていた。出迎えてくれたシャーリーに導かれるように進むと、その先にデバイスは置いてあつた。

「そうです！制作主任は私、協力はなのはさん、フェイトさん、ダークさん。更にレイジングハートさん、バルディッシュュさんにりイン曹長。オマケに、外部協力者として様々な方にも協力していました！」

シャーリーの言葉に、驚きを隠せない四人。彼女は続ける。

「なのはさんに聞いていると思うけど、今回新デバイスを渡すのはスバル、ティアナの二人ね。デバイスの名前は順番に【マッハキヤリバー】、【クロスミラージュ】って言います。それぞれ皆さん の自作デバイスのデータから作ったものです。」

にっこり笑うシャーリーに、エリオは聞いた。

「あの、僕達のデバイスはどういったところが変わるものでしょう

か？見た目は変わっていないうに見えるのですけど……」

「そうみたいだね……」

「デバイスを見る二人に、上から声が掛けた。

「それについては私が説明するですよ」

「リイン曹長？」

待つてましたと言わんばかりに、何処からか現れるリイン。ふわふわと飛んで、デバイスの上で停止する。

「エリオとキヤロのは、今までデバイスに慣れてもう為に最低限しか搭載していなかつた機能を追加してます。見た目は変わってなくても、中身は今までとは大違います！」

「い、今までの最低限だったんですか！？」

「そうだったんだあ……」

「デバイスの性能に驚く二人。と、その時だった。

「それとね……これを渡す前に、皆に大切な話があるの。」

「部屋に入ってきたのは、なのはだった。

「なのはさん……話というのは……」

ティアナの質問に、なのはは答えた。

「この『デバイスの…』『設計をした人』の話。」

「設計…？え、これを設計したのって…」

「ううん、私じゃないんだ。正直、私たちはただ設計図通りに組み立てただけ。」

そう言つて、首を振るシャーリー。すると、なのははファイルに入つた紙を四人に手渡した。

「これは…設計図ですか？」

一番上は、マッハキャリバーの設計図になつていて。紙の質からして、意外と随分前に書かれていた物だということだけは分かつた。ただ、横に書いてある文字はミックドチルダのものではなかつた。

「何て書いてあるんでしょうか…？」

「待つて、私に見せて！」

そう言つて顔を近づけたのはスバルだつた。

「これ…地球の文字ですよ！私の父さんの故郷の…」

それを聞いて、驚く三人。スバルはそこに書いてある名を読み上げた。

「えっと…2005年12月23日…れを記す…流…竜馬…？」

「そう……流竜馬。それが、この四枚の設計図を描いた人の名前。これはね、今から十年も前に書かれた設計図なの。」

その言葉に、全員が驚きを隠せなかつた。

「ええっ！？じゅ、十年前なんですか！！」

特に、自作組のスバルとティアナは、思わず声を上げてしまつた。

「あ、あの、そんなにすごいんですか？」

「そうよ、キャロ。デバイスは一年変わるもので随分性能も変わつてしまつた。それなのに、魔法文明の全く発達してない地球でなんて……なのはさんやハ神二佐は本当に特別なのよ？」

確かに、普通の電化製品でも十年たてば性能を大きく後れを取つてしまつ。それなのに、シャーリーやなのはに手の入れる場所が無いと言わせるほどの技術力は半端ではなかつた。

「初代ゲッターチームのリーダー、流竜馬……彼自身も、凄腕の魔導師だったの。ゲッターロボは、彼のバリアジャケット時の姿をモーデルにしているの。接近戦なら、私とフェイトちゃん一人でかかっても勝てないほどの強さなの。何度も私たちの命を助けてくれた、師匠みたいな人……」

そして、なのはは言つた。

「でもね、この設計図を描き終わつた翌日……ある戦いで命を落としてしまつたの。私たちを、助けるために……」

「そんな……」

兄を失ったティアナは、余計にその気持ちが分かつた。なのはは続ける。

「弱かつた私は、何もできなかつた。ただ、竜馬さんが死んでいくところを見ているだけしかできなかつた。だからね、強くなろうつて思つたんだ。あ、ごめんね？昔話しちゃつて……」

話を聞いた四人は、複雑な心境だつた。なのはの師匠……とは違うのだが、彼女の人生に大きな影響を与えた男、流竜馬。彼の遺書とも言うべき設計図から生まれた、デバイス……そして、ゲッターロボ。四人の前に、リインが降りてきた。

「……リインは、竜馬さんを知らないのです。でもでも、みんなに渡すこのデバイス達は、竜馬さんと私達の技術と経験の粹を集めて完成させた最新型なのです。部隊の目的に合わせて、それでいて、みんな其々の個性に合わせて設計、改良された文句なしに最高のものです。この子たちには、多くの人たちの思いや願いが一杯込められて……そして、竜馬さんの遺志ともいえるものなのですよ。いっぽい時間をかけて作られたものです。だから唯の道具や武器と思わないで、大切に……だけど、性能の限界まで、全開まで使つてあげて欲しいです！」

「「「「はいっ……」」」

リインによつて浮かび上がつたそれぞれのデバイスを手にした四人は、感謝の気持ちも込めて大きな声で返事をする。それを見てシヤーリーたちは、喜びの笑みを見せた。

ミッドチルダ某所

薄暗い地下室の中で、一人の男が大きな装置を前にして作業をしていた。装置は隣に設置されている巨大なコンピューターに繋がれており、遠くからは機械音と溶接音が絶え間なく聞こえてくる。

「ドクター、失礼します。」

そこへ、淡い紫色の髪をした女性が部屋へと入ってきた。男は手を止めず、少し顔を後ろに向けた。

「ウーノか。どうした?」

「新型G、23機完成しました。チンク、ウェンディ、ノーヴェの三名が機動テストを行いましたが、テスト用の5機とともに、動作は好調のようです。」

静かにうなづくと、男は画面に目を向けた。

「それだけじゃないのだろ?...ウーノ。」

「はい。して、ドクター。……後、どれくらいで完成するのですか?」

「それはわしが答えよう。」

ウーノの頭に、グロテスクな顔の老人が答えた。

「ああ、あなたでしたか…」

「ひひひ、もう少し、もう少しというところだ。それにしてもスバラシイ！今、今この瞬間でさえもアレは進化をつづけている！この研究所のゲッター数値がそれを物語っているのだよ、ふ、ふひひひ…」

老人の不気味な笑いに、ウーノと呼ばれた女性はため息をついた。

「ええっと、もういいです…して、ドクター。ガジェットがレリックに接触しました。恐らく管理局との戦闘は避けられません。旧型とはいえ、ガジェットだけではゲッターに勝てないのでは…？」

それに、紫の髪の男は答えた。

「ああ、それは百も承知だ。今回は、レリック収集と共に、向こうのゲッターの性能の調査も兼ねている。どこまでゲッターGの開発が進んでいるか…も、知りたいからな。」

振り向く男と同時に、部屋の中に電気が灯る。そこには、無数のカプセルと、ゲットマシンを一回り大きくして鋭くしたような形状の戦闘機らしきものが停まっていた。

「時間は、大いにある。はは、誰も止められはしない。世界最後の日を…な。」

それは、ちょうど機動六課の隊舎に一級警戒態勢を告げるアラー

トが鳴り響く、10分前の事だった。

機動六課隊舎

「！」のアラートつて……」

「……一級警戒態勢！？」

突然鳴り響いたアラートに、前線メンバー全員の表情が引き締まる。なのはは冷静に、モニターに呼びかけた。

「グリフィス君！」

「はい！教会本部から出動要請です！」

部隊長補佐を勤めているグリフィス・ロウラン准陸尉が答える。それに続き、朝から聖王教会に出向いていたハ神はやてが、別のモニターに映し出された。

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。いらっしゃって。」

「一体何があったの？」

音声通信先のフェイトの言葉に、はやては説明を始めた。

「教会調査団で追っていた、レリックらしき物が見つかった。場

所はエイリム山岳地帯。対象は、山岳トーラーで移動中。

「移動中つて…まさか…？」

はやての言葉に、フロイトは声を上げた。

「そう、そのまさかや。内部に侵入したガジェットで、車両の制御が奪われている。リニアレール車内のガジェットは最低でも30機…大型や、飛行型の未確認タイプも出ているかもしねへん。」

説明を続けるはやての表情は、険しい。それだけ、状況が好ましくないのだろう。そんなはやてを見ている為か、モニターを見る皆の表情も険しいものとなる。

「いきなりハードな初出動や。なのはけやん、フロイトちゃん…
…いけるか？」

「私はいつでも…！」

「私も…！」

各々の隊長は、自信に満ちた口調で返事する。それに押されてか、新入たちも顔を上げる。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。みんなもオーケーか？」

「…」「はい…！」

その元気のいい返事を聞いて、はやは笑顔になる。

「よし、良いお返事や。シフトはA・3、グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制。」

「はい！」

「はー！」

敬礼をして、リインは場を離れ、グリフィスはモニターから消えた。

「なのはちゃんとフロイドちゃんは現場指揮ー。」

「うんー！」

「ほんなら、機動六課フオワード部隊……出動！！」

一斉に走り出す新人たち。

「私は後から合流するから、みんなヘリに乗つて！E-6のトモ
工曹長にお願いして！」

なのはに一斉に返事をすると、新人たちは指示を受けたへりへ向かつた。

「おう、来たな。」ひちだ！」

四人の先には、へりの前で手を振る一人の男の姿があつた。その片方・帽子をかぶつた大柄の男を見た瞬間、スバルは思わず声を上げてしまった。

「あ…ええつ…あ、あの時の…！」

そう、一瞬だけ顔を合わせたスバルには分かつたのだ。田の前にいる男が…

「ええと、あの…すみませんでしたあ…！」

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃつたけど、練習通りにやれば大丈夫だからね。」

現場へと向かうへりの中、なのはは新人達に話しかけた。なのはが来る前に色々あつたようだが、武蔵は終始嬉しそうに笑っていた。

「はい！」

「頑張ります！」

「ヒリオとキャロ、それにフリードもしつかりですよ！」

リンに言われて、一人も

「はい！」

—キューヶーツ！

「一人の励まし」、それぞれの言葉で元気にフォワードメンバー達が答える。もつと緊張しているかと思ったなのはだつたが、彼女たちも、そして武藏も一役買つているのだと思うと心の中で礼を言つた。皆に微笑むなのは。

「危ない時は、私やフロイト隊長、リインがちゃんとフォローするから、おつかなびっくりじゃなくて、思いつきにやってみよつー。」

しつかりとした返事に、なのはは再度満足そうな表情を浮かべながら頷く。

「てめえひ、いかとい最近腰いてえんだよ…死体なんて運ばせんじゃねえぞ?」

「ちょっと、ムサシ先輩！？」

いきなり呵々と笑いながら言つ武蔵に、想像してしまつたのかキヤ口の顔が青ざめる。

「わかった、武藏さん。キャロが固めたわけじゃないでしょ?」

「え…？あ、その、すまん。はは、ちょっと冗談を…」

「冗談が冗談に聞こえないですよ、先輩…」

あきれ半分に笑い、なのはは苦笑した。

「キユク～」

心配そうに、キャロの顔を覗き込むフリード。見ると、キャロの手が震えていた。気付いたなのはは、キャロの隣に座る。

「……大丈夫？」

「はい、すいません……」

沈黙。まるで葬式の様だと武藏は言いたくなつたが、これ以上下手な事を言つたら口にスター・ライト・ブレイカーだらうなと冷や汗を流した。

スバルは、念話でティアナに話しかけた。

『はじめてで、いきなりになつちやつたけど……一緒に頑張ろつ
ね、相棒。』

『ええ、スバル。だけど、この時のために私たちは訓練を続けて
きた…』

『うん。だから…がんばるわーー』

様々な心境でいる新人メンバーをのせてヘリは飛んでいく。武蔵は険しい表情で、帽子をかぶりなおした。

キャロSude

今、私達は、ヘリに乗つて現場へと向かつてゐる。この先に待つてゐるのは実戦……今までの訓練とは違う、本番。

正直言つて私は怖い。トモエ空曹が何気なく言つてたけど……ひょつとしたら、ひょつとしたら、終わつた後みんなが元気に顔をそろえられるか、それは誰にも分からぬ。空戦の怪我や死亡事故は聞いた事はあるけど、実際に現場に居合わせると、今まで聞いてきた言葉がふつふつと蘇えてくる。ティアナさんのお兄さんや、なのはさんがさつき言つていたナガレさん。私たちより、ずっとずっと才能も経験もある人たちでも、一瞬の判断で帰らぬ人になつてしまふかもしれない。

でも、でも、それ以上に……私は誰かを傷つけるのが怖い。私の竜召喚は、フリードだけじゃない。そのせいで、私は故郷を追われた……でも、私は少しほつとした。もし、何も関係のない人を傷つけてしまつたら……そう思つただけで、随分変わつた。

「あ……」

その時、私の手が誰かにギュッと握られた。見上げると、そこには私の心が分かつたかのように無言で手を握るのはさんの姿があつた。そうだ、迷つていられない。決めたから。一緒に戦うパートナーと、一所懸命な先輩達と……そして、きっと私と同じ思いを持

つた優しい子。これから自分が、みんなと一緒に進む、この道を……

「なのはさん……はい！」

静かにうなづくなのはさん。こんなになのはさんが頼もしく見えたのは、はじめてだつた。

機動六課

「問題の貨物車両、速度70を維持。依然進行中です。」

「重要貨物室の突破は、まだされてないようですが……」

「時間の問題か……ツー！？」

はやての代わりに指示を出すグリフィスと、シャーリーを初めとするオペレーター陣は突然鳴り始めた警戒音に表情を引き締める。

「アルトールキノ！広域スキャン、サーチャーを空へ！」

オペレーター陣が素早い作業で現場空域にエリアサーチを行うと、多数の機影をキャッチする。それはただちに情報として纏められていく。

「ガジェット反応……空から！」

「航空型、現地観測隊を補足！」

グリフィスの声と同時に、モニターにフェイトの顔が映った。

「こちらフェイト。グリフィス、こっちは今パーキングに到着。車停めて現場に向かうから、飛行許可をお願い。」

「了解。市街地個人飛行、承認します！」

通信が入ったフェイト達の申請を、グリフィスは迷う事無く許可をする。承認を聞くと、フェイトからの通信が切れた。

フェイトの車から、サイレンが展開される。けたたましく鳴る赤いシグナル。フェイトはパーキングエリアに車を停車させると、車の外へ走り出した。

「バルディッシュ！」

『Yes, sir.』

走りながら、フェイトはバルディッシュを空に掲げた。

「バルディッシュ！セー————ット・アップ！——！」

その声と同時に、稻妻に似た光をフェイトが纏う。光がはじけると、そこからバリアジャケットを纏ったフェイトが空に舞い上がった。

「ライトニング！、フェイト・T・ハラオウン…行きます！…！」

「武蔵さん、ヴァイス君。私も出るよ。フライテ隊長達と空を押さえる。」

「うつす。なのはさん、お願ひします！」

「おつよ、行つてこー。」

Main hatch Open

なのはの言葉に、ヘリのパイロットである川武蔵曹長と、ヴァイス・グランセニック陸曹がサムズアップで答える。それと同時にヘリのメインハッチが開かれる。

「お気をつけて。」

「うん、それじゃ、行つてくれるね。」

そう言つて、ハツチの方へと歩いて行こうとするなのは。しかし、何を思ったのか足を止めて、新人達の方へ引き返してきた。

「じゃ、おまつこ出でへぬかび……みんなも頑張つて、ズバッとかいつたがれやがれやー。」

元気よく答える新人たちの中にも、キャロの姿があった。なにも薄々気づいてはいたが、やはり、すこし体が震えていた。姿勢をかがめて、キャロに目線を合わせるなのは。

「キャロ、大丈夫だよ、そんな緊張しなくても。離れてても、通信で繋がってる。一人じゃないから……。ピンチの時は助け合えるし、キャロの魔法は、みんなを守つてあげられる……優しくて強い力なんだから。」

「なのはさん……」

少しずつ、元気が戻ってくるキャロ。それを見て、微笑むなのは。それを確認すると、添えていた手を離て、メインハッチへと足を進めた。

「スタート1、高町なのは、行きます！」

そしてハッチからなのはが飛び降りると、少しして桃色の光が空に向かって吸い込まれていった。

「任務は一つ。ガジェットを逃走させずに、全機破壊する事。そして、レリックを安全に確保する事。ですから……」

作戦内容を伝えるリイン。いつものほわほわした表情ではなく、その顔は凜々しく引き締まっている。きびきびとした指示に、少し緊張する新人たち。その隣のモニターには、リニアアレールが映し出

されている。

「スターズ分隊とライトニング分隊で、ガジェットを破壊しながら車両前後から中央へ向かうです。」

説明が進むと同時に、モニターに中央車両がズームアップされる。コンピューターで再現されたマップに、ターゲットを表すオレンジの記号が現れる。その数は、半端なものではなかつた。

「これ、全部…敵ですか？」

エリオの問いに、リインは頷く。

「はいなのですよ。でも、最優先事項はレリックの確保が先だと
いう事は忘れないでほしいのですよ。レリックはここ、七両目の重
要貨物室。無駄な戦闘はできるだけ避けて、スターズかライトーン
グ、先に到達した方がレリックを確保するですよ。」

「で、つ！」

リインがその場で一回転するごとにバリアジャケットを身につけだ状態になる。白を基調としたそのバリアジャケットは、なんとなく凛々しさが5%くらい上がったかのようだ見えた。

「私も現場に降りて、管制を担当するです。みんな、頑張ってい
くです！」

急にいつもの様子に戻ったリインに、皆に笑いが起る。緊迫した場が癒されると同時に、改めて新人たちは気を引きしめた。

「こっちの空域は、私達で抑える。新人達の方、フォローお願ひ！」

「了解！」

視界の先にるのはを見つけたフェイトは、進行方向をそちらへと変える。並走するなのはとフェイト。なのはは念話でフェイトに話しかけた。

『同じ空は久しぶりだね、フェイトちゃん。』

『うん、なのは……』

すると、前後から挟み込むように戦闘機型のガジェットが数機接近してきた。しかし、それに臆することなく一人は向かっていく。

『こちラスターズ1。ライトニング1と合流後、ターゲット5機と接触。ただちに殲滅します。』

『了解しました。お気をつけて。』

頷くグリフィス。なのははフェイトに顔を向ける。

『うん。いくよ、フロイトちゃん。』

『うん、なのはー。』

同時にうなづくと、空で閃光が巻き起しつた。

「さて新人ども。隊長さん達が空を押されてくれているおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備は良いかー！」

「「「「はーーー！」」」

ヴァイスが新人たちに檄を飛ばす。その横で武藏も言つた。

「やつは悪い冗談言つて、すまなかつたな。でもなー俺たちがいれば、お前らは絶対に死なんーー背中はぜつてえ守つてやる。だから、怪我と始末書書かん程度に頑張んなーー！」

「「「「はーーー！」」」

開くハッチ。ゆっくりとコニアレールに接近するべり。

「速度、姿勢、風向き…安定しましたーーいつでも行けます、先

輩！！」

「そうこう」とだ。よし、お前らー。まずはスタートーズだー。気合入れていけーー！」

「はー！スタートーズ3、スバル・ナカジマ…」

「スタートーズ4、ティアナ・ランスター…」

「行きますーーー！」

メインハッチから、降下を始めるスバルとティアナ。それを確認すると、続いて武藏は指示を出す。

「くつ、いきなりミニンチは避けたみてえだな。次つ、ライトニング！訓練は受けているとは思うが、風圧はあんたらの体じや少々きつい。チビジモは気いつけるよーー！」

「「了解ーーー！」

先に降下したスバルとティアナに続く為に、エリオは身構えて飛び降りようとする。しかし、視界にキャラが入った時にある事に気がついてその動きを止めた。

「……………」

キャラは、下で走るコーアレールをじつと見ており、ぎゅっと両手を握り締めている。そんな様子のキャラを見たエリオは少し悩んだ後にキャラに向けて手を差し出した。

「ねえキヤ口……一緒に降りようか？」

「えつ……うん」

エリオの提案に一瞬戸惑いを見せながらも、エリオの手をしつかりと握り返すキャロ。

「うらやましそうだな、嫁は一次元、彼女いない歴エターナルのヴァイス君。君の嫁をみんなに見せるぜ？今度。」

「死んでください、先輩！！」

そのやりとりを聞いて、顔を真っ赤にする一人。

「えつと...」

一
あ
あ
の
.

キユク

どうしたの？と首を傾げてくるフリードに、二人ははつとなる。すると、自分の体が宙に浮いている事に気がついた。

「お・が・え・う・」

いつまでたつても出撃しようとしない二人にしびれを切らしたのか、武蔵が良い笑顔で二人の首根っこを掴んでいた。

۱۱۱۱۱۱

悲鳴を上げながら、ブン投げられるヒリオとキヤロ。気付くと、お互いの手をしつかりとつないでいた。

「えーと… お週ぐなーではど!! ハヤヒー! ハグミ エリス・モン ディアル!」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリビー。」

—キュケーツ！

「一 行も無く…」

武蔵の言つていたように、風圧は凄かつた。きっと、ちゃんとつないでいられるように突然武蔵は投げたのだと、エリオとキヤロは気付いていた。最も、武蔵の理由はもつと別にあつたのだが、それはちょっと先の話かもしれない。

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「セット・アップ・バー」

はじめての実戦。だが、この戦いの裏にある影を、このときもさ

誰も知る由も無かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7481u/>

真《チェンジ！！》リリカルなのは 世界最後の日

2011年11月20日11時24分発行